

20

東京都現代美術館研究紀要

13

関 直子

はじめに

昨年、生誕百年を記念する回顧展が開催された桂ゆき(1913-1991年)は20歳代に九室会の創設に関わり、晩年に美術館で個展が開催されるなど、同世代の日本の女性美術家のなかで早くから評価を受けた例外的な存在であった。その批評においてはコラージュを戦前から手がけたことが特筆される傾向にあったが^{註1}、実際には1930年代からコラージュと細密描写と戯画的表現という3つの表現方法を並行して展開し、異なる表現方法の対比、表現対象とその表現方法の関係、そこで生じる価値の反転を追求していた^{註2}。3つの表現を様々に組み合わせて創作した点に、今日に連なる重要性が認められるのであり、本稿ではジョアン・ミロ(1893-1983年)との関係を指摘できる2点の紙作品を出発点として、戯画的表現を軸にこの問題を考えてみたい^{註3}。それは、この画家が同時代の表現とどのような関係を取りながら創造を展開したのか、また当時の文化的中心から距離をおく所で展開した創造活動の共通性とモダニズムの多様なあり方を考える契機ともなるはずである。併せて桂のいくつかの作品を性格づけるカーニヴァル的な要素についても言及したい。

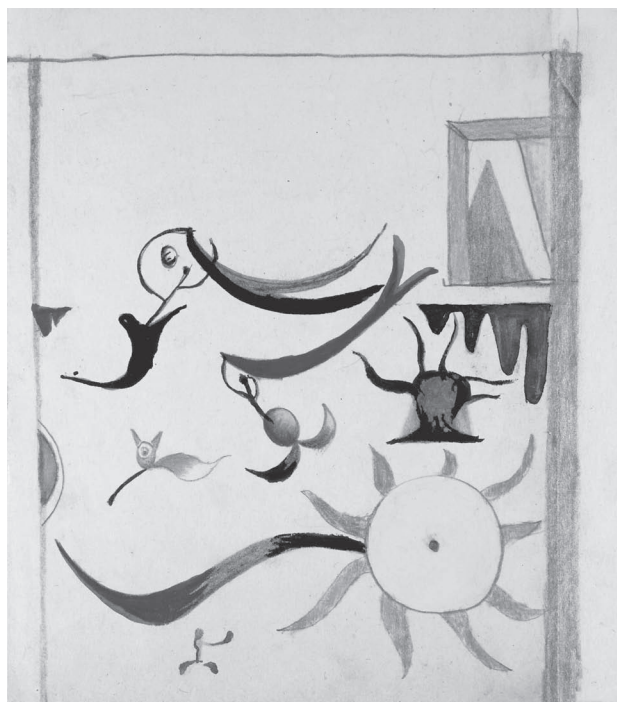


図1
桂ゆき 東京都現代美術館蔵

1 2点の紙作品

桂にとって同時代の前衛的な表現に関する情報が増え、本格的に独自の表現への模索が始まったのは、フランスから帰国した東郷青児や藤田嗣治等が指導する駿河台のアヴァンギャルド洋画研究所に通い始めた1933年頃からと考えられる^{註4}。1930年代には新しい試みであった戯画的表現を油彩画で展開することと並行して、紙に描いた地獄絵で、卵形の顔に丸い目だけで表現された人物など、現代の漫画と見紛うものを残しており、その紙の上端には画鋏の痕があることから、画家がこのような表現に親しんでいたことが判る。

本章ではこのような説話的な表現を揶揄するようなイメージ^{註5}とは別の戯画的表現の水脈として、2点の紙作品をとりあげたい。それは、画家が晩年まで手元に保管していたもので、鉛筆、色鉛筆と水彩で描かれている。タイトル、年記等は付されておらず、本稿では19.5×21.5cmの方を図1、19.3×14.0cmの方を図2と呼ぶこととする。図1は、縦長の紙の三辺が直線で囲われ、その内側に複数の記号的な形態がランダムに配されたものである。モチーフはいずれも日常的な生活空間にあるものとは直截的な関連を付け難いものであるが、中心に黒点のある太陽のような黄色の円とそこから左にたなびく3色の線、はためく布を

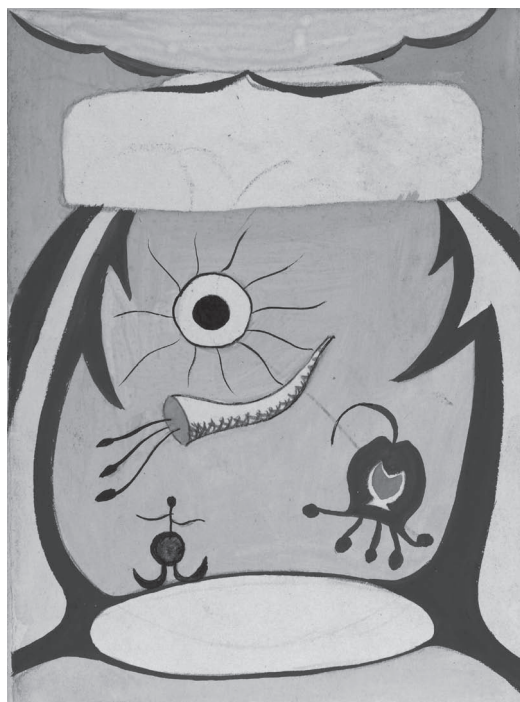


図2
桂ゆき 東京都現代美術館蔵

掲げ持つ黒いY字型のものなどは、ジョアン・ミロによる《アルルカンの謝肉祭》（1924-25年、以下表記の異同を避けるため《アルルカンの謝肉祭》^{図3}と記す）^{図3}の画中のモチーフを選んでスケッチし、再構成したものと考えられる。ミロは1920年代にこれらと類似のモチーフを他のカンヴァスでも描いているが、桂の図1の右上の赤い棒とその中の黒い三角形、そしてこの窓の下方に描かれた黒い波形とは、《アルルカンの謝肉祭》^{カーニヴァル}に特有のモチーフであることから、その引用元のひとつをミロの本作と想定してよいと考えられる。もちろん、元のミロの作品が横長のフォーマットのところを、縦長の構図に描きかえているわけであるから、モチーフのいくつかは省略されているばかりか、選択した各モチーフも大きさや細部の形状には異同が散見される。しかし室内で賑やかに繰り広げられるカーニヴァルの情景は、画面空間が圧縮されたとは言え、同じように室内であることが意識された空間において、重力から解放された表現となっている点で、その意図は息づいている。また画中に描かれたその他の要素、例えば太陽の左下の両脚を上げ、右腕を掲げるかのようなかたちには、ミロの《家庭》（1924年）の窓の下に描かれたものとの類縁性も感じられるし、また球体の胴とそこから口髭のように跳ね上がる脚と球形の胴の上方にマッチ棒のように細く伸びる上半身で表された虫のように小さな人間（以後本稿では便宜的にちいさなヒトと呼ぶ）、編み込んだ髪が頭部から周囲に伸び広がるような黒いかたちなどは、ミロの《母性》（1924年）^{図4}から一部のモチーフを選んだものと考えられる。

一方、図2の方は、茶色と黄色のドーム状の壁で囲われたピンク色の領域に、光線を放つ黄色の円、その下には三本の鎌が下がる角笛のようなかたち、下方には図1にも描かれた、ちいさなヒトが両腕を上げています。これらのうちちいさなヒトや角笛のような形は、やはりミロによる《母性》（1924年）の中から選ばれたモチーフと考えられる。ミロの絵では半円形の乳房の先にちいさなヒトが、また角笛のかたちの上方に繊毛状の広がりをもった黒い頭のようなものが抽象的な空間に対角線上に配されて、母性というタイトルが付されていた。桂の図2では、これらの情報を基に、その設定と個々のモチーフがドーム状の胎内

イメージに転換されているようにも見受けられる。

以上のように、桂は元になったミロの作品の主題や描かれたモチーフを或る程度尊重しながら、複数の作品の中のモチーフを組み合わせたり、いくつかの新たなモチーフを追加している。ここで注目されるのは、ただかたちを模写したのではなく丁寧に彩色が施されていることであり（色鉛筆の上から水彩がはじくように彩色されている）、選択と組み合わせ、更に新しい構図への変換という創作が行われている点である。

この2点にミロの原画とは異なる色が付されていることは、複製媒体がモノクロームだった可能性を示唆するものであろう。ミロの複製図版については、1940年代初頭までミロの画集が欧米において刊行されていなかったことを鑑みると、海外の雑誌を丸善などを通して桂が目にしていただことも考えられるかもしれないが、桂が実際に丸善で目にしたことを言及しているのはダリについてである。仮に交友のあった美術関係者を通して『カイエ・ダール』を手にしていただとすれば、1934年から37年まで毎年、そして40年に当時としては鮮明なミロの作品図版を目にいただことも考えられる^{註6}。次に、晩年まで作家の手にあった美術雑誌の多くが邦文のものであったことから、模写の際に参照したのが、日本の雑誌や本であった可能性を探りたい。蔵書の中には古い時期のものとして1927年10月の『みづゑ』が残っていたので、シュルレアリスムについての初期の紹介記事、1928年5月の『美術新論』（《旅館》以下戦前の文献に図版が掲載された際のミロ作品のタイトルは当該頁での表記）や同年9月の『アトリエ』（《寄席案内者》）、また1930年1月の『アトリエ』で《開墾した土地》《月に吠える犬》《母性》等のミロの作品を目にいただ可能性もあるが、日本へのミロの紹介の中心となったのは、瀧口修造であり^{註7}、まとまった数の図版を伴う重要なものは1930年のアンドレ・ブルトンによる『超現実主義と絵画』の翻訳である。同書にはミロの1923年から1926年に制

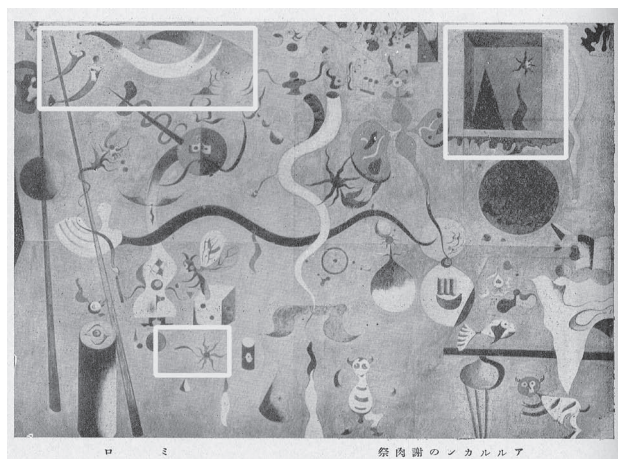


図3
ジョアン・ミロ《アルルカンの謝肉祭》1924-25年
（『アトリエ』1938年12月号 P.67より） 白棒は、本文での言及箇所を示す。

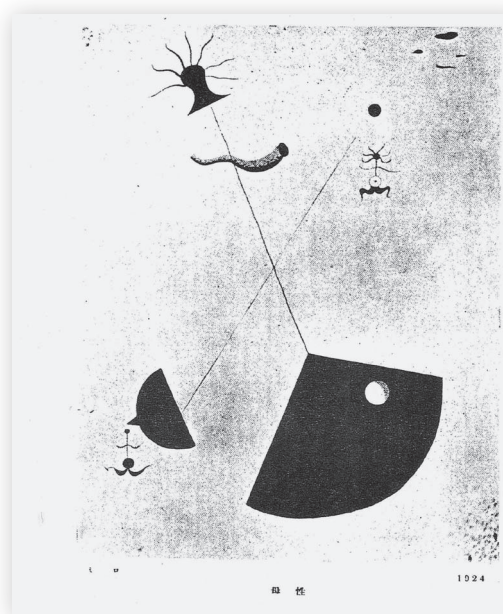


図4
ジョアン・ミロ《母性》1924年（アンドレ・ブルトン著瀧口修造訳『超現実主義と絵画』厚生閣書店 1930年 P.38より）

作された6点、《耕地》《カタローニュの風景》《家庭》《母性》《曲芸》《鳥を捕らえる手》の白黒図版が一頁に一点掲載されていた。1932年にはミロの実作品《焼ける森の中に於ける人物構成》と《青のファンタジー》が東京府美術館での「巴里・東京新興美術展」のために招来されている。1936年2月の『みづゑ』には福沢一郎の文章に2点(タイトル表記はないが《動く風景》と《自然の前の人間》)が、同誌9月号には瀧口の文にコラージュとデッサンが、1937年1月の『アトリエ』には《九月》、同年5月の「海外超現実主義作品展」に招来された作品を特集した『みづゑ臨時増刊海外超現実主義作品集』に4点の《絵画》と《風景》《符号と形態》《和蘭の室内》、『アトリエ』6月号には《縄と人物》《絵画》が掲載されている。更に同年『みづゑ』6月号には瀧口が本格的なミロ論を執筆し、《月に吠える犬》をはじめとする絵画13点と《コラージュ》1点が紹介されている。同年7月には署名T.Y.によるユーモアをめぐる文章にカリカチュアのような人物デッサンが掲載された。翌1938年10月の『アトリエ』にはカラーで《風》が、同誌12月号にはミロ自身の「大きなアトリエが欲しい」という文に《アルカンの謝肉祭》^{カーニバル}《スペインの踊り子の首》《グワッシュ》が、そして1940年3月には戦前の最も重要なミロ紹介の文献として、当時世界で初めてのミロの画集が瀧口の執筆によりアトリエ社の西洋美術文庫から刊行され、《夏》(1938年)がカラーで巻頭に置かれたほか、白黒で47点の図版が紹介された⁸⁵。更に同年9月には『アトリエ』でトリスタン・ツァラによるミロ論が福永武彦の翻訳で掲載され、10点の図版が紹介されている⁸⁸。

ここで桂が画中モチーフを描いたミロの《母性》と《アルカンの謝肉祭》^{カーニバル}が掲載された文献に注目するならば、《母性》が掲



図5
瀧口修造『ミロ』アトリエ社
1940年 表紙

載されたブルトンの単行書の邦訳は、刊行年は1930年だが30年代にシュルレアリスムの基本書となっていたものであり、桂が油絵を習い始めてから手にとることは容易であっただろう。また、1938年末の『アトリエ』と、40年の初の画集には《アルカンの謝肉祭》^{カーニバル}が掲載されている。それゆえ、これらのミロの複製図版を桂が1930年代前半から目にしていたであろうことは想像に難しくなく、またモチーフを基に紙作品を描いた可能性もあるだろうが、1938年に、雑誌『アトリエ』に、桂のコラージュ作品の写真(阿部芳文撮影)に詩を付した瀧口が、ミロ紹介の中心であったこと、そしてその後の桂の油画の展開を鑑みれば、実際の制作はおおよそ1938年から40年ころと考えるのが妥当であろう。改めて30年代後半の桂の展覧会等での活動を追ってみると、35年にコラージュによる初個展を開催しその秋には二科展に初出品、36年も二科に2点出品するも翌年に個展を控え37年は発表活動がない。38年には二科に2点出品し、その後藤田の勧めがあって日動画廊で個展を開催し、翌10月には、吉原治良や峰岸義一等と九室会の創立に参加している。39年には東京と大阪で

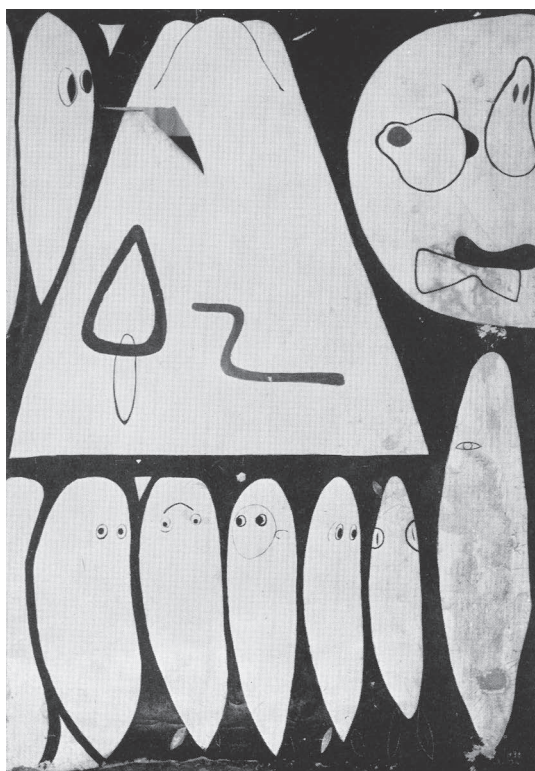


図6
桂ゆき《人間I》1938年(『戦前の前衛展』1976年より)

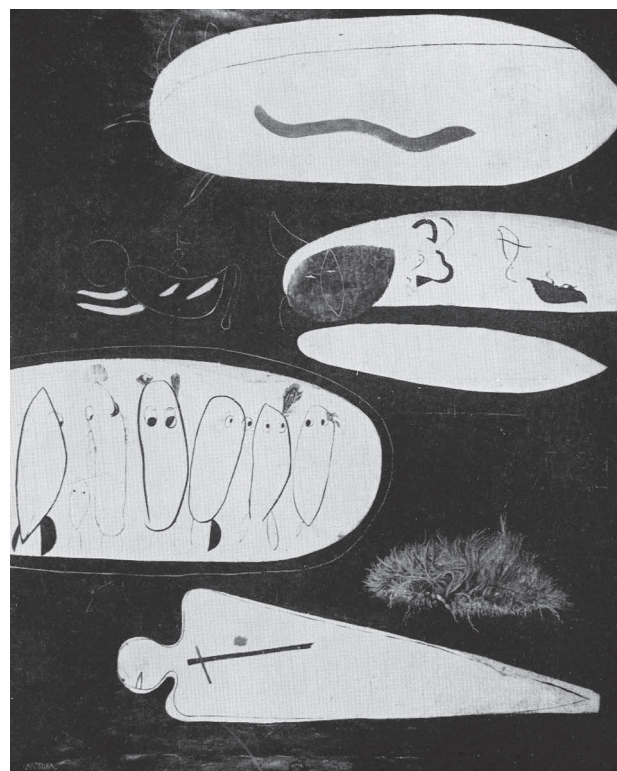


図7
桂ゆき《人間II》1940年頃(『戦前の前衛展』1976年より)

開催された九室会展に、また秋には二科展に3点出品し特待に推挙される。40年には2回目の九室会展、二科では会友に推挙され、10月には紀元二千六百年奉祝美術展覧会に出品している。つまり、この時期は桂の戦前の活動の中で新作の発表活動のピークの時期にあたるのであり、模写をしていたミロの作品の中のモチーフや作品の構造、主題等が、桂の創作の可能性にどのような示唆を与えたかを検証することは、その作品展開に新たな道筋を与えてくれるはずである。

2 九室会出品作《人間Ⅰ》と《人間Ⅱ》

桂がミロの《母性》と《アルルカンの^{カーニバル}謝肉祭》の中のモチーフを描いていた事実を確認してみると、1940年の九室会第2回展に出品した2点の油彩作品《人間Ⅰ》（発表当初は《山と月と人》）^{図6}と《人間Ⅱ》（《人》）^{図7}は新たな様相をもって捉えることができるかもしれない。ことに、《人間Ⅱ》の画面中央より左寄りの両腕を左側に伸ばすものの背中の上に描かれている人間^{図7a}は、ミロの《母性》の中のちいさなヒトと類似の形状を示している点が注目される。

ここでは更にその右側に横たわる白い形状のものにも目を向けたい。その緑色の頭部には眼が線描され、胴体には、不思議な記号が黒く描かれている^{図7b}。一見するだけでは線の断片のようだが、その右手の黒い塊に髭のように生え出る線がどうやら文字のごときものと判ると、自然の風物のなかに文字を忍ばせる葦手絵、あるいは判じ絵のようなものではないかと想像される。中央のやや大きく濃い部分は画家の名字をひらがなで記した「かつら」の「か」の縦棒が欠落したもの、そしてその左側の細い線は、本名の「雪子」の雪の冠の縦棒を脱落させたものらしいことがわかってくる。後年《親亀の背中に子亀をのせて》（1970年）で路線図の架空の駅名として桂の名を画面中央の亀の背に描き込んでいるように、桂は兄弟の多かった自らの姿をそれとなく示そうとすると、このような方法を画面に仕掛けて

いる。

これらの文字が、伝統的な葦手絵よりもっと目立つような場所に描かれていることは、例えば1930年のブルトンの邦訳に掲載のミロの《カタローニユの風景》（1923-24年）の画面右下の大きなsardというアルファベット（カタルーニャのダンスSardanaの語尾が脱落したもの）の文字が、記号化されたモチーフと共に描かれていることとの強い類縁性を感じさせる。ミロにおいて文字が画面内のイメージと同等の比重を持つのは、モチーフの記号化が進んだ場合であり、桂がこれらの事例を念頭におきながら、自らの名前を画面の中心近くに配するのはやはり、人間が殆ど実体を持たなくなったような戯画的な記号化を進めたときなのである。しかも謎掛けのように、文字の一部を脱落させて、その読み解きははぐらかされている。

更に画面下部で、胸に赤い傷を負い十字架の描かれた人物は、逆三角形のフォルムをとるが、この形状は、やはり1936年2月の『みづゑ』掲載のミロによる《動く風景》（1935年）^{図8}の大地の真中あたりで横たわる同様の形状のものと、死を連想させる形状ばかりでなく、地面を示す黒い色面に記号的なモチーフが配される構成が共通している。そして、画面最上端に横たわる白い形状の胴の部分には、赤い線が波打って太くくっきりと描かれており、39年10月の『みづゑ』にカラーで掲載されたミロの《風》の画面左下で、赤い線で描かれた生き物との類似が見出されるのである。以上のように、桂の《人間Ⅱ》は、大根状の身体に眼と足、それに髪飾りなどを纏う極めて記号化された存在を除くと、モチーフの形状の類似や、記号と文字の使用法、平面的な画面処理といった点で、日本で紹介されたミロ作品との共通点を指摘できる。

しかしやや窮屈な構図などは、元のミロ作品の浮遊する画面



図7a
桂ゆき《人間Ⅱ》部分 1940年頃



図7b
桂ゆき《人間Ⅱ》部分 1940年頃



図8
ジョアン・ミロ《動く風景》1935年（『みづゑ』1936年2月号P.122より）

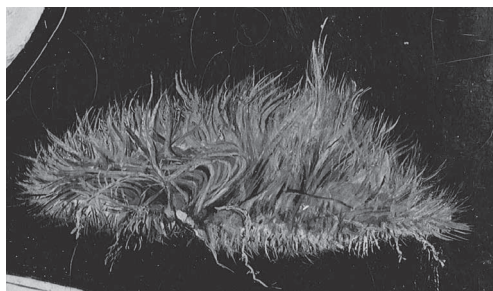


図7c
桂ゆき《人間Ⅱ》部分 1940年頃

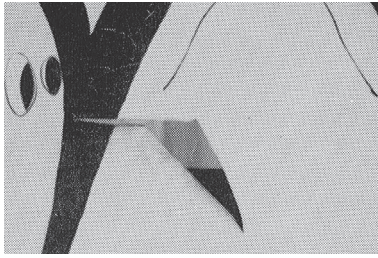


図6a
桂ゆき《人間Ⅰ》部分 1938年

空間の特質との差異を示すものであり、それ以上に異なるのは、平坦な色面の過半が戯画的記号的表現で占められているなかで、画面の右下に、あえて異質な、細密な描写の叢を描き込んだことである^{図7c}。

同じ九室会展に展示したもう一点、《人間Ⅰ》も、一見すると同じように戯画的表現が圧倒する作品である。この作品の複製図版としては1979年に開催された画廊での個展の際に撮影された写真が、長く使用されてきたが、実は、1976年に開催された「戦前の前衛展」(東京都美術館主催)の図録写真を見ると、山の左上の大根状の人物から山に向けて、2色の旗がコラージュされていたことが判る^{図6a}。画面の左上の人物が旗を掲げる例は、ミロの《アルカンの謝肉祭^{カーニバル}》を想起させるわけだが、ここでは、目立つ位置に旗が貼付されている。これら2点が九室会に発表されたとき、戯画的かつ記号的な表現で描かれた油絵に、コラージュと細密描写が挿入されることで、この3つの異質な表現方法が拮抗する、実験的な画面構成が目論まれていたことがわかる。即ち、コラージュと細密描写という、物質をめぐる二項対比の段階から、戯画的な表現を通して、寓意性とラディカルな人間表現という要素が加わり、桂の創作は、画面上のモンタージュ的なイメージ操作から、多層的な表現の対比により、油絵を成立させる前提そのものを主題とする複雑な構造の絵画へと進展していくのである。

更に1976年撮影の図版を観察すると、《人間Ⅰ》の画面右下には、1938 Y.KATSURAの年記があるが、《人間Ⅱ》の方には画面左下にKATSURAの文字しか認められない。最初に《人間Ⅰ》を制作したのち、1940年春までに《人間Ⅱ》を制作したところで、対作品として2点を1940年の九室会で発表することにしたのではない。それゆえ、制作から30余年を経て戦前の前衛を検証する1976年の展覧会に出品するとき、ばらばらだった《山と月と人》と《人》というタイトルを、対作品のように人間に統一しⅠ、Ⅱと改題したのかもしれない。

ところで、同じ年の秋の紀元二千六百年奉祝美術展覧会には、前衛を標榜する九室会への出品作とは一転して、個々のモチーフが比較的判読しやすい静物画《賀象》を出品しているのだが、こちらでは、戯画的な表現や具体的なモノを貼付けるコラージュは控え、細密描写だけを追求している。しかし、一見すると油絵の描写だけに見えるが、複数の緋の切れ端があらわされた画面下部に接近してみれば、緋の縦糸は油絵具を縦に削り込んであらわされており、カンヴァスは決して単一の描写だけで構成されているわけではない。桂は発表する場に応じて、表

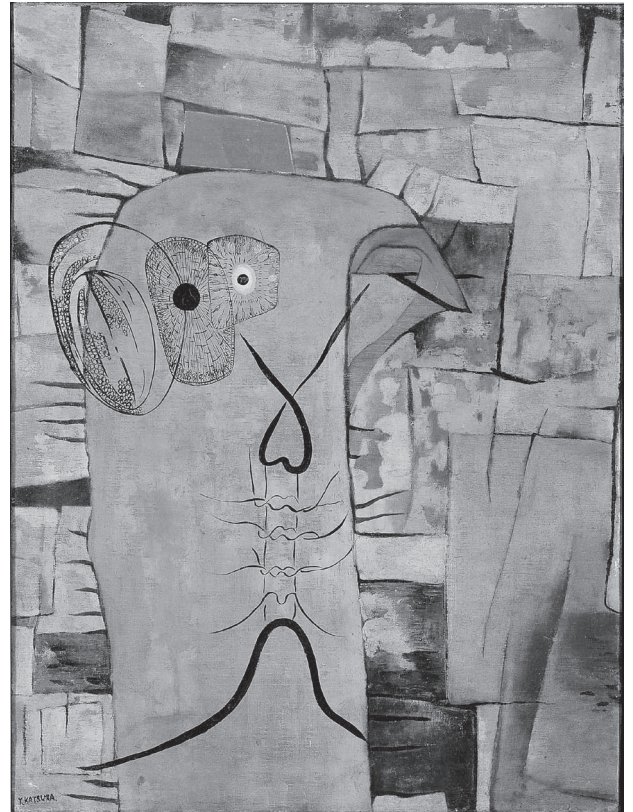


図9
桂ゆき《おしゃれなゲジゲジ》1938年 北九州市立美術館蔵



図10
九室会第1回会合(新宿、中村屋) 1938年10月(前列中央が桂、左は東郷青児、後列右端は吉原治良)

現の組み合わせを選択していたのである。

以上本章では、自然のなかの人の営みを描いた《人間Ⅰ》《人間Ⅱ》が、ミロの絵画を参照するなかで、3つの表現方法を追求していた30年代の桂作品の中で最も実験的な表現が齎されたものだったことを確認した。

3 《おしゃれなゲジゲジ》と緋を纏う女性像

1938年から40年ごろに制作されたと考えられる九室会出品作にミロとの関係を見出すことができるとするなら、1938年の年記が画面裏に貼付けてある《おしゃれなゲジゲジ》^{図9}の極めてユニークな形状と主題もまた新たな側面から見るが必要になってくるだろう。

この油彩作品の画面の構成は、九室会の出品作とは異なり、



図11
桂ゆき 東京都現代美術館蔵

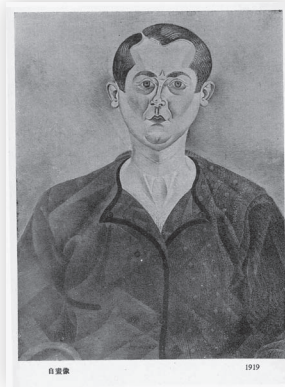


図12
ジョアン・ミロ《自画像》1919年（瀧口修造『ミロ』アトリエ社 1940年 P2より）

1938年の『みづゑ』に掲載された石膏などを用いたレリーフのようなコラージュと同様の、矩形のモジュールを単位として、平面を分割しながら覆っていくものである。同時期の《土》では一部の矩形が隙間となって、桂をとりまく様々なイメージがモンタージュ的に嵌め込まれているのに対し、このゲジゲジの方は、土壁のような面の前で屹立する筒型のものが、所在なげにこちらを見つめている。背景と同化しているため判り難いが、背中や胴体から伸びる無数の茶色の足は確かにこの虫の特徴をあらわしている。脊椎が透けて見えることから、外見は虫だが、その身体は人間ということらしい。表現もタイトルも突出してユニークなこの作品を桂は制作後20年近くを経て漸く、1955年の二科展第二会場で発表した。当時、自分のなかにゲジゲジが住みついていて、それをちゃんと形と色で具体的に描きたいと思ったと雑誌に書いている。（後年大庭みな子と対談したときにも、自分がゲジゲジになった夢、つまり手足がみな短い足になって、必死にもがく夢を見たことに言及するなど⁸⁹、戦後も紐やマッチ棒をはりつけて足を触覚的に表現した、百本足とか千

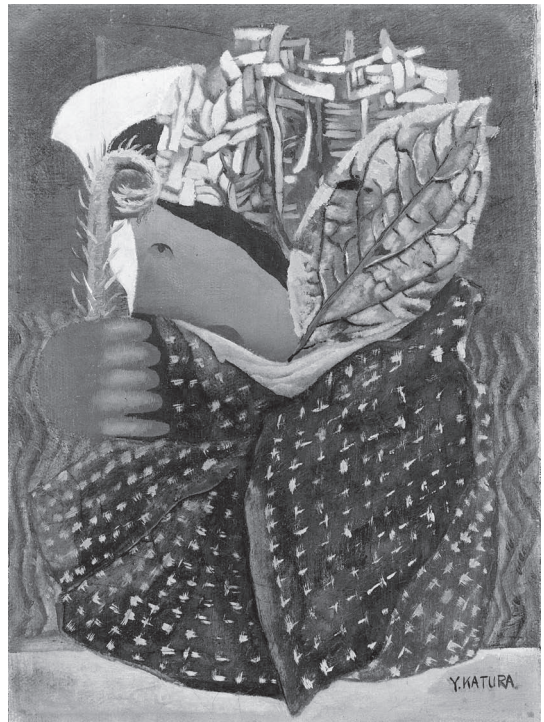


図13
桂ゆき《農婦》1951年

本足といった作品を制作している。)戦前のこの作品は、地面に這いつくばるのではなく、屹立し、戸惑っている様子が、つぶらな瞳や九室会結成時愛用していたトルコ帽¹⁰、パステルカラーの化粧によって増幅する。人の姿をまるで虫のようないきもののかたちであらわすこと、グロテスクだがユーモアをたたえた表情、フォルムとは無関係の肥瘦のある黒い線などに1920年代後半のミロの人を描いた油彩との関係を指摘できるだろう¹⁰。

自画像として更に注目されるのは、襟元に自らの名前を記した女性像¹¹である。桂が晩年まで手元においていたこの作品の若い女性は、数種類の紺をまとい、もんぺと草履をはきながら、モダンな短髪の頭に植物を飾り花を抱える、様々な要素をミックスさせたおしゃれの上級者としてあらわされている。それは、カタルーニャ出身のミロが、1919年に描いたガリバルディーナと呼ばれるこの地方の農民の服を着た自画像¹²（1940年のミロの画集に掲載された）において、右半身は、織物の表面が細密に表現されているのに対し、左側はキュビズム風の処理が施されていることと比較し得る。風土にこだわる表現と、パリの最新の国際様式という絵画創作をめぐる葛藤が身につける衣服によって表現されているのである¹¹。ミロの自画像が一次大戦直後に自らの立ち位置を模索した状況をあらわしていたように、桂は洋装の鉛筆デッサンの部分と、水彩によるいくつかの紺の描写を組み合わせることで、異種混淆に直面しながら、滑稽さでもなく、またキマイラのようなグロテスクさでもなく、選択と組み合わせにひとつの創造のあり方があることを示そうとしている。

戦後に描かれた《農婦》¹³は更に、批評的性格を強めたものである。図11の女性がフランス人形のような顔立ちだったのに比し、極端に戯画的な横顔を見せる農婦は布巾と枯葉を被り、



図14
桂ゆき《桜》部分 1943年
下関市立美術館蔵



図15
桂ゆき《春》部分 1948年
広島県立美術館蔵



図16
桂ゆき《人間の歴史》部分 1953年
下関市立美術館蔵



図17
桂ゆき《はだかの王様》部分 1969年
横浜美術館蔵

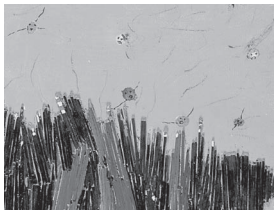


図18
桂ゆき《作品》部分 1963年
下関市立美術館蔵



図19
桂ゆき 部分 東京都現代美術館蔵



図20
桂ゆき 紅絹による作品 (1985年) の展示風景 2013年

身に纏う緋はよく見ると大きな襟のついた西洋風の上着であり、右手で握りしめる薔薇は、高位聖職者が持つ杖のようだ。即ち、西洋近世の肖像画はもとより、それを理想として描かれた明治期の肖像画まで射程に入れて、肖像画の枠組みを用いて、戯画的な顔と細密に描写された布、洋服と緋の対比など、服装と表現によって、戦後の日本の状況を可視化したものである。麗子像

なども想起させる重量感のある服の描写はここでは戯画的な表情と相まってグロテスクでさえあるのだが、その批評的態度の対象は、緋を仕立てたレース襟のスーツで外出していた桂自身にも^{註12}、また近接過去の買い出し先での経験にも向けられていたのかもしれない。

4 ちいさなもののたち

前章では桂の自画像ともいえる作品をとりあげたが次に、画面のなかにそっと、しかし画面を構成する重要な存在として描き込まれた、ちいさなもののたちについてその姿を追ってみたい。

ミロの記号化されたいきものは絵画空間のなかで自由気儘に浮遊する小さなものも多く、1940年代以降の桂の作品の中の主人公を脇から眺めるちいさなものとちの接点を見出すことができる。1943年の《桜》^{図14}や1948年の《春》^{図15}において、小さな人たちは、中心にあるものからやや距離をおき、飛び跳ねようとするかのような様子が小さく描かれている。それは、磔刑や牛なども描かれた西洋的な1953年の《人間の歴史》の画面右下の馬上の人の回りで囃し立てている、目玉人間たちにつながっている^{図16}。

更に1960年代に制作された王様や寓話の主人公たちを、脇から眺める小さな人たちの存在も忘れてはならないだろう^{図17}。いずれにおいても、主役と脇役は軽々とその立場を入れ替え、カーニヴァル的な状況が現出する。けむしの回りを飛ぶものたちにも顔はあり^{図18}、また、身近な風景の中の木の回りにも、まるでクリスマスツリーの飾りのように、靴やリボンなどが楽しげに飛んでいる^{図19}。

晩年、1985年に個展で発表した紅絹の道具たちは、よくみると端の方に角が生えており、九十九神のような存在ともいえるが、それはとりもなおさず、百鬼夜行、即ち夜半に行列を成す、道具のカーニヴァルと言えるものである^{図20}。

5 縄をめぐる

桂とミロの関係を考えると、以上のような戯画的な表現や価値の転倒をみるカーニヴァル的な世界観といったものの共有を指摘できるのであるが、もう一点、縄をめぐる表現について考えてみたい。水爆実験からほどなく発表された《人と魚》^{図22}など1954年ころに制作した油絵で、桂が細密描写による縄の表現を核として、人間の身体の方を逆に戯画的にあらわし、表現の対比によって、極めて緊張度の高い画面を創り上げたことはよく知られている。即ち、植物が乾燥してただの物質となった縄の方を油絵具で細密に描写する一方で、人間の方は戯画的な表現をとることで、描く対象とその表現方法を逆転させ、西洋的な油絵表現、そして価値観にゆさぶりをかけたのである。

縄の材料である藁への関心は、もちろん、コルクや枯葉、押し花、たわしや麦など、乾燥した植物への愛好という桂の生涯にわたる乾燥してザラザラしたものへの触覚的な愛着からも説明



図21
ジョアン・ミロ《縄と人物》1935年
（『アトリエ』1937年6月号より）



図22
桂ゆき《人と魚》1954年 愛知県美術館蔵

できるものである。また、吉原治良の《縄をまとう男》（1931-33年）なども縄への関心のひとつの契機として指摘できるかもしれない。だが、ミロの1935年の《縄と人物》^{図21}（『アトリエ』1937年6月号に掲載）の縄が戯画的な人間像をおしのけて中心に無造作にただ貼り付けられている画面の、唐突で暴力的なまでの視覚的インパクトは、桂のコラージュ感を揺るがすものだったに違いない。しかし桂はその衝撃を、縄そのものをコラージュするのではなく、油絵の具で細密描写することによって、表現方法を変換したのであった。1930年代に桂がコラージュの素材として選んだものは、乾燥して物質となった植物由来のものと、リボンやレース、布そして印刷物などであった。いずれも美術作品の材料というより、日常的なものであったが、素材に関する通念的な性別の境界を無化するような選択だったと言えるだろう。視覚的にも物理的にも存在感のある縄は、平坦な戯画的表現に対して、効果的な対比を齎すのであり、縄をまるでコラージュしたように細密描写するという表現方法に到達したこの50年代前半の時期、桂は素材を貼り付けることから遠ざかり、主に油彩による、戯画的表現と細密描写の対比を極限まで追求したのである。

おわりに

以上、1930年代後半以降の桂の造形的な展開において、ミロの作品との関係から考察できることがらをいくつかの具体的な作品を通して検証した。桂の創作の多面性は、ひとつには既存

の表現に対する自分なりの咀嚼をとおした批評的性格によるものであり、もちろんミロ作品のモチーフや表現の参照も意識的なものだった。しかし同時に、例えば1937年2月に集中的に制作したスケッチブックでは、自宅や上野公園で実際に目にしたひとびとを、ジョージ・グロスのような筆致で捉えたことが判っており（1929年には柳瀬正夢による『無産階級の画家 ゲオルゲ・グロス』が出版されていた。グロスの展覧会を柳瀬が開催したのは1937年5月。）、30年代から40年代の油絵は、造形的な試みだけでなく、このようなダダ的な社会批評性を孕んだものとして捉える視点が必要である。従って、たとえば1938年に雑誌に掲載された桂自身の文章「擬寶珠の芽」のなかで、『『クヤピツハソウ』私はその名を逆にしてみてはった!と手をうちました。クヤピツハ草は今年も例年のように芽ぶいています。』^{註13}と書いたことも、ただの言葉遊びや日常の約束事を反転させるだけでなく、あらゆることに対し、別の視点から世界を捉えることの重要性を意識していたことを示している^{註14}。

1930年前後に桂よりひとまわり上の世代の画家が、都市や科学技術といった近代の可能性を肯定的に捉え、その複製図版のモンタージュ的構成の絵画に向かったのに対し、震災後の復興期の東京で、金属という基幹産業に関わる研究に従事する親のもとで成長した桂にとっては、近代的な都市生活は既定の環境であり、流通するイメージを批評的に借用したうえで触覚や身に纏うというより直接的な体験に基づく細密描写と、更に人間心理の本質を寓意の衣で戯画的に表現することとを併存することによって、固定観念にゆさぶりをかけることに向かった。やがて桂は時間的にも空間的にも間口を広げ、土俗的ともいえる古い時代のポピュラーカルチャーに親縁性を見出し、またあるときは、蒐集した、傍から見ればただのかけらのような乾燥したものを並べていった。コラージュによる初個展をひらき、戦後は社会事象をめぐる批評的な主題をとりあげるなど、桂はひとつの動向に収斂されることのない、即ち一般的な分類では整理できないような活動を展開したのだが、キュビズムと細密表現とコラージュという表現の振幅を経験したミロの存在が視野に入ってくると、桂だけが全く孤絶した存在だったわけではなく、文化の中心から距離をおくところで展開した創造活動の共通性とモダニズムの多様なありかたが浮かびあがってくる。ミロとの関係から捉えるとき、桂が戦前を回想して、地平線や水平線のあるシュルレアリスム一辺倒は面白くないと記したことの意味が諒解されるのである^{註15}。

戦後桂はヨーロッパに滞在中、スペイン旅行の帰途バルセロナに足を延ばしたことが手書きの地図と手紙からわかっている。その地図には、翌1958年に訪れることになるアフリカ大陸の北端も書き込まれており、そこで桂の物質観や絵画表現は新たな局面を迎えることを付記しておきたい。

註

1. コラージュを核にした批評では、瀧口修造「時の余白に」『桂ゆき展』東京画廊1979年6月n.pag.、針生一郎「コラージュの両極から生まれる虚構の空間」『みづゑ』893号1979年8月pp.37-43、岡田隆彦「桂ゆき・コラージュの豊かな展開」『物体とイメージの間・桂ゆき』西武百貨店ザ・コンテンツポラリー・アートギャラリー 1986年2月n.pag.等がある。
2. 拙論「桂ゆきーある寓話ー」『桂ゆきーある寓話ー』展図録、東京都現代美術館・下関市立美術館、2013年、pp.6-16。
3. 細密描写は、女学校時代に日本画を勧めた両親を説得して卒業後始めた油画学習の動機となったものだが、これとて、大正時代に岸田劉生や村山知義が意識的に対象の細密描写を選択したように、強固な意図に基づいて選ばれた表現であったのだが、その経緯については別稿で論じることとしたい。
4. 後に桂はアヴァンギャルド洋画研究所時代のことを以下のように回想している。「先生は東郷青児、古賀春江の両氏である、ということを知った。アカデミックな油絵の手ほどきをうけた私は、あきたりない気がして昭和8年頃にこの研究所にかよってみた…古賀先生はもう健康を害されていて、来られなかったが、東郷先生はとき折り見えて、興味深いよいおはなしや、みなの作品の評をしてくださった…藤田嗣治先生は久しぶりに、パリから、帰朝され二科会員になられたが、ある日その研究所に来られた…土びんをタテヨコにひっくりかえしながら、キュビズムの説明をされた…ある日研究生10名ほどは、藤田先生をかこんで、山梨の上の原に一泊旅行をした。夕食後先生は、私がスケッチ帖にはさんで持っていた、数枚のでこぼこのコラージュの絵を、ていねいに見てくださり、『雨傘とミシンが解剖台の上で、ひょっこり出会ったように美しい』というロートレアモンの詩のひとふしを教えてくださいながら、コラージュをおもしろいといってください。後に先生は私を日動画廊の社長に引き合わせ、個展をするようにすすめてくださった。」(桂ゆき「九室会のこと」『戦前の前衛展』東京都美術館、1976年 n.pag.)
5. それは、例えば1936年の油彩《作品》の、咲き誇る花芯から目を丸くした雷神が飛び出してくる表現へと連なる。
6. 桂は後年、小説家の大庭みな子との対談で、シュルレアリストの中で唯一、ダリの複製に触れた時期を回想して、1930年代の後半に丸善を通してであったと述べている(桂ゆき、大庭みな子「対談」『終わりのない旅』『大庭みな子対談集 やわらかいフェミニズムへ』青土社、1992年pp.163-201)。
なお1930年代の『カイエ・ダール』*CAHIERS D'ART*誌でミロ作品の複数の図版が紹介されたのは、以下の号である。Christian Zervos, Maurice Raynal, Robert Desnos, Benjamin Péret, René Gaffé, Ragnar Hoppé, George Antheil, Will Grohmann, Vicente Huidobro, Pierre Guéguen, James Johnson Sweeney, Léonide Massine, Herbert Read, J.V. Foix, Jacques Viot, Anatole Jakovski “Joan Miró”, Ernest Hemingway “The Farm”, 1934, nos. 1-4, pp. 11-58には、《アルルカンの謝肉祭》《自画像》を含む37点もの図版が紹介されている。Maurice Henry, “Joan Miró”, 1935, nos.5-6, pp. 115-116には、《縄と人物》《動く風景》を含む4点の図版が、Jacques Viot “Un ami: Joan Miró”, Georges Duthuit “Où allez-vous Miro?” 1936, nos. 8-10, pp.257-266には1935-36年制作の13点の図版が、Paul Eluard “Naissances de Miró” 1937, nos.1-3, pp. 78-83には1910年代の図版8点、Tristan Tzara “A propos de Joan Miró”, Georges Hugnet “Joan Miró”, 1940, nos.3-4, pp. 37-48には1939年の図版が14点掲載されている。
7. 日本におけるミロ紹介において瀧口が果たした役割については、杉山悦子「戦前期日本における『超現実主義』とミロー主要文献の紹介」『ミロ展1918-1945』愛知県美術館、世田谷美術館 2002年pp.167-178が詳しい。

8. 1937年の瀧口のミロ論には《B夫人の肖像》《家庭》《月に吠える犬》《西班牙の踊り子》《カタロニアの風景》2点《コラージュ彫刻》《グワッシュ》《彫刻》、1927年の《絵画》2点、1933年の《絵画》2点と《コラージュ》の図版が掲載された。また、1940年のツァラのテキストには《風と女達》《女の頭》《遁走の梯子》《夜中の鳥と女達》《夜の鳥》《髪を編む女》《女と蝶》《太陽の前に立つ貴人達と鳥》《蜘蛛の網の罫に睡むるロザリを守る鳥の翼から落ちる露の滴》《献づけられた風景の音楽の上を歩く磁化された人々》の図版が掲載された。

なお、1933年9月に亡くなったため、アヴァンギャルド洋画研究所で桂が指導を受けることのかなわなかった古賀春江は、1928年に刊行されたブルトンによる『シュルレアリスムと絵画』の原著から、ミロの《母性》と《鳥を捕らえる手》《裸体》の一部分を、画帖(東京国立近代美術館蔵 1930-31年頃)に模写していることを速水豊氏が指摘している(速水豊『シュルレアリスム絵画と日本 イメージの受容と創造』NHKブックス 2009年pp.84-85)。古賀は桂と同じように、《母性》の中の、ちいさなヒトと編み込んだ髪が頭部から周囲に伸び広がるような黒いかたちを模写していた。

9. 桂ユキ子「おしゃれのゲジゲジ」『美術手帖』105号1956年2月p.102、桂ゆき、大庭みな子「対談」前掲書pp.163-201。

10. 例えば、ミロによる1927年の《絵画(肖像)》(Asher B. Edelman蔵)では、土色の色面に、横向きの顔に点じられた黒目の周囲が、青、黄色、赤の円形の点線で囲われており、《おしゃれなゲジゲジ》と比較し得る点が多い(Jacques Dupin, Ariane Lelong-Mainaud, Joan Miró, *Catalogue raisonné. Paintings, Volume I: 1908-1930*, cat.no.251)。

11. カタルーニャでは20世紀初頭に伝統的な価値に基づいて近代的な民族文化を目指すノウセンティズムが勢いを増し、1910年代はそのピークにあたるが、ミロは新しいヨーロッパの動向を吸収したうえで、地域の独自性を備えた美術を目指していたという。ミロは「細密主義」の時代に極東からの影響を受けていたと自ら語っているというが(村上博哉「ジョアン・ミロ1918-1945」『ミロ展1918-1945』前掲pp.16-32)、桂はその事実を知る由もなかったであろうけれど、この時代のシュルレアリスム周辺の画家たちのなかで、ダリやエルンストではなくなぜミロに桂が関心を寄せたのかを考えるうえで、ミロと日本の美術との線描や細密描写をめぐる往還は興味深い。

12. 《農婦》を描いた翌1952年の新聞に、桂は《農婦》を簡略化したカットを添えて、「ジュラルミンの塀」と題した短文を寄せている。その中で桂は、明治以来の日本の油絵制作の状況を、隣家に倣い、竹垣を壊してジュラルミンに替えることに喩え、西洋の巨匠に仕えるばかりでも、また異端視することも避け、世界の芸術を咀嚼し、自分は常に主人でいたいと述べている(桂ユキ子「ジュラルミンの塀」『山陽日々新聞』1952年3月1日)。

13. 桂ユキ子「春ひらく 擬寶珠の芽」『ホーム・ライフ』1938年4月p.31。

14. ヨーロッパ滞在から帰国後1962年に桂は「魔女」と題して、旅行中、箒にまたがった魔女人形を買い集めたことから書き起こして、ヨーロッパでは悪魔は中世までは庶民の生活のなかに生きていて無邪気で生命力にみちた活発ないたずらをしたが「悪魔の夜宴」は野外で、開放的なお祭り騒ぎのようなものであった一、時代とともに秘密めいた犯罪的な形に変わり、野外のかわりに都市の教会内に侵入したり、退廃的な貴族の専有物となってしまったと述べたあと、「アヴァンギャルド芸術が、悪魔と同様にいつも生活の習慣とか常識を破り、生命の全的な開放を行う非合理的なものとするれば、悪魔が教会内に逃げ込んだように、アヴァンギャルド芸術がアカデミーの中に逃げ込んで幅をきかせたり、コマーシャルと手を組んで、合理主義に迎合したりモダニズムの微温湯につかったりするようになれば、それはユウシキマがごとであるといえよう。」と締めくくっている。(桂ユキ子「魔女」『藝術新潮』1962年1月号pp.42-43。桂にとってカーニヴァルのなものへの関心は、作品制作をめぐる態度とかかわることがらだったことが諒解される。

15. 「訪問・二人の作家(二)桂ユキ子」『美術手帖』1953年4月pp.44-47。

『美術館ニュース』（東京都美術館発行） 総目次(2)

長谷川菜穂 編

昨年度の総目次(1)に引き続き、今回は昭和31(1956)年1月発行の61号から昭和37(1962)年9月発行の140号までの目次を掲載する。『美術館ニュース』の書誌情報については、総目次(1)を参照のこと。



美術館ニュース61号

凡例

- ・本目次は『美術館ニュース』（東京都美術館刊）第61号（昭和31年1月）から第140号（昭和37年9月）までの各号の総目次である。
- ・本目次の表記は、原本見出しをもとに作成し、不足箇所や原本見出しに示されていないものは、本目次作成者が補足し、□（角カッコ）で括った。
- ・東京都美術館と美術団体の活動に関係する見出しを中心に記し、友の会についての記述は誌面の都合上省略した。
- ・本目次では旧漢字は常用漢字に改めたが、旧仮名遣いは原本のままとした。
- ・数字は算用数字に統一した。
- ・図版と写真については必要と思われるもののみ記した。
- ・挿絵については題名と作者が記載されているもののみ記した。

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.61	昭和31年1月15日	新春を迎えて 私の抱負	早川治平	1
		写真：[早川治平氏]		1
		明治期の洋画 物故作家とその作品-明治前期の渡欧者たち-	岡畏三郎	3-4
		図版：《操人形》五姓田義松、《コンスタンチヌス凱旋門》松岡寿		3
		第11回日展地方開催		4
		美術界レポート		4
		「夢」	横地康国	5
		借館団体懇談会		6
		美術館施設の充実		6
		杉山司七氏[前美術館長]後援会事務局長辞任		6
		[訃報]安井曾太郎氏逝去		6
		1・2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第10回日本書道美術院展、第18回謙慎書道会、第4回独立書道展、第4回回瀾会、第9回書道芸術院展、第16回美術文化展、第5回奎星書道展、モダンアート展、第5回高風会展		2
		第5回書道教育展、第22回書壇院展、第30回国風盆栽展		5-6
No.62	昭和31年2月15日	明日への活力	中野和高	1-2
		前衛書道(上)	香川春蘭	1-3
		安井画伯絶筆《秋の城山》東京国立近代美術館へ		4
		“松方コレクション”国立西欧美術館の設立決定		4
		国際工芸美術協会設立		4
		毎日美術賞決定[受賞者名簿]		4
		美術団体告知板(旺玄会、新制作協会、創作工芸協会)		4
		明治期の洋画 物故作家とその作品 浅井忠	岡畏三郎	5-6
		図版：《収穫》《ロアン橋上》		6
		美術館後援会新事務局長 谷信一氏就任		6
		2・3月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第8回読売日本アンデパンダン展、第24回池坊東京華道展、第9回示現会展、第32回白日会展、第15回水彩連盟展、第6回一線美術展、第8回三軌会展		2-3
No.63	昭和31年3月15日	書壇の現状	平尾孤往	1-2
		前衛書道(下)	香川春蘭	1-3
		借館団体総会		3
		ベニス・ビエンナーレ展出品作品国内展示会		4
		第5回上村松園賞決定		4
		恩賜賞・芸術院賞授賞者決定[授賞者名簿]		4
		第6回芸術選奨授賞者決定		4
		川端龍子氏の天井画 浅草寺に龍図完成		4
		美術団体告知板(日本美術振興会、日本画府、日本彫金会、東光会、国際工芸美術協会、造形同人会)		4
		明治期の洋画 物故作家とその作品 黒田清輝	岡畏三郎	5-6
		図版：《湖畔》《読書》		5-6
		日本芸術会館の建設		6
		3・4月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第15回創元会展、第4回清真会展、第42回光風会展、第5回新興美術院展、第24回日本版画協会展、第30回国画会展、第4回大東書道展、第4回日本彫塑家クラブ展、第33回春陽会展		2-3
		[鑑賞案内 その他]		
		故安井曾太郎遺作展 ほか		4
No.64	昭和31年4月15日	山の女 海の女	野口弥太郎	1
		前衛書道-はじめて鑑賞される方々に-	香川春蘭	1-3
		フローレンス国際手工芸展[出品作家名簿]		4
		第4回日本画賞受賞者決定[受賞者名簿]		4
		[訃報]高村光太郎氏		4
		美術団体告知板(水彩連盟)		4
		日本洋画「あけぼの」明治初期洋画展(佐藤記念室)		5
		図版：《ブルガリアの女》百武兼行、《自画像》チャールズ・ワーグマン		5
		日本書道美術院総会		6
		4・5月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第10回霹靂社展、第16回日本画院展、第22回東光会展、第7回創差協会展、第1回新世紀美術協会展、第2回現代日本美術展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.65	昭和31年5月15日	[鑑賞案内 その他]		
		青龍社展覧会(東京日本橋三越本店) ほか		2
		漆工芸	山崎覚太郎	1-2
		日本洋画「あけぼの」明治初期洋画展覧会(佐藤記念室)[陳列作者名簿]		7
		写真：会場風景4点		7
		借館団体懇談会開催		8
		日本工芸会総会		8
		日本彫塑家クラブ総会		8
		5・6月の展覧会[団体展スケジュール]		10
		美術界レポート		10
No.66	昭和31年6月15日	[鑑賞案内 都美]		
		第10回女流画家協会展、第4回前衛美術会展、第44回日本水彩画会展、第4回光陽会展、第5回創型会彫塑展、第10回旺玄会展、第8回自主連立(新構造社、創造美術会、朱葉会)展、第12回現代美術協会展		2
		偽物	藤井令太郎	1
		挿絵：《倣写案》藤井令太郎		1
		移動巡回展の計画[陳列作品目録]		3
		図版：《午後の女》森田元子、《鶴の森》中沢弘光、《裸婦》藤本東一良、《メキシコの男》福沢一郎		3
		日本芸術院第12回授賞式挙行[受賞者名簿]		4
		日本芸術院31年度総会		4
		第2回現代日本美術展入賞者決定		4
		伊原宇三郎氏、ヴェニス・ビエンナーレ国際美術展へ		4
		村松乙彦氏渡米		4
		硝子の話	岩田久利	5
		彫刻と素材	和田新	6
		6・7月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		全国書道教育展、第13回朝聞書会展、第25回朔日会展、第52回太平洋画会展、第6回台東書道、第5回日本書道院展、第7回玄友会展、第27回第一美術展、第10回職場美術展、第17回大日本書芸院展		2
No.67	昭和31年7月15日	美人	長沢節	1-2
		昭和31年度下半期美術館使用割当決定		3
		第12回日展要綱決定		3
		[訃報]海野清氏		4
		竹芸	飯塚琅玕斎	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ	浅尾丁策	6
		7・8月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第8回毎日書道展、第6回回連合書道展、第4回“1956年”平和美術展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		霹靂社東京展[秋葉原デパート] ほか		4
		働く人の為のデッサンのタペ	栗原信	1
		日本古美術品欧州展へ		2
		第5回全国美術館会議[本間美術館]		3
No.68	昭和31年8月15日	写真：美術館会議風景2点		3
		J.D.C.A(日本デザイナークラフトマン協会)設立		4
		荻須高德氏に勲章[フランス政府より]		4
		日本美術家連盟会長に前田青邨氏就任		4
		陶磁器	宮之原謙	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(2)	浅尾丁策	6
		8・9月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第41回日本美術展、第41回二科会展、第11回行動美術展、第18回一水会展、第20回新制作協会展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		第2回一陽会美術展[日本橋高島屋] ほか		2
		素人日本画入門	望月春江	1-2
		第1回美術館主催“巡回展”開催		3
		中国絵画複製展覧会・近代日本の版画(木版、石版、銅版)展覧会(佐藤記念室)		3
No.69	昭和31年9月15日	図版：《山形県新道写生石版画帖の中》(絹本着彩)高橋由一、《両国花火の図》(木版)小林清親		3
		グッゲンハイム賞参加について		4
		昭和31年度日本美術家連盟役員決定		4
		私達の仕事 織物の見方	柳悦孝	5
		美術界告示板(一水会、示現会、現代工芸協会)		5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(3)	浅尾丁策	6
		10月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第二紀会10周年記念展、第20回自由美術展、第24回独立美術協会展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		上代(埴輪、金銅)と現代日本の彫刻展[東京国立近代美術館] ほか		2
		明日の彫刻	藤野舜正	1
		昭和32年度上半期美術館使用割当決定		3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.71	昭和31年11月15日	第1回美術館主催“洋画名作巡回展”		3
		美術館後援会臨時総会		4
		サンパウロ国際美術展参加計画決定		4
		美術文化第17回展(昭和32年度)開催予定		4
		日本美術品欧州展計画決定		4
		染色	般若侑弘	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(4)	浅尾丁策	6
		坂本繁二郎氏文化勲章に内定		6
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第12回日展、第20周年記念大潮会展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		高村光太郎・智恵子遺作展[神奈川県立近代美術館鎌倉] ほか		2
		書の話	柳田泰雲	1
		近代日本の版画展覧会出陳目録・中国絵画複製展終了(佐藤記念室)		3
		写真：近代日本の版画展会場風景2点、[中国絵画複製展ポスター]1点		3
		第12回日展受賞者[名簿]		4
		写真：[集合写真]、[会場風景・彫塑]		4
		金工の話	山脇洋二	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(5)	浅尾丁策	6
		美術館増築の請願		6
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
No.72	昭和31年12月15日	[鑑賞案内 都美]		
		第9回勤労者美術展、第6回書道学会展、第31回国風盆栽展、第23回書壇院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		近代日本絵画名作展[東京国立近代美術館]、光風会日展受賞作家展[光風会館内] ほか		2
		本年度美術界の回顧	谷信一	1
		美術館昭和32年度諸事業計画		3
		上野駅前に美術館専用掲示板設置		4
		第3回借館団体懇談会開催		4
		文化財保護委員会発表-新国宝28点-		4
		第2回美術館館内従業者懇談会		4
		篆刻の話	香川峰雲	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(6)	浅尾丁策	6
		12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第10回書道芸術院展、第11回日本書道美術院展、第5回独立書道展、第5回回瀾会展、第19回謙慎書道展、第17回美術文化展、第10回日本美術会展、第4回書星展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		現代書道20人展[出品作家名簿][上野松坂屋] ほか		4
No.73	昭和32年1月15日	新春を迎えて私の抱負	早川治平	1
		写真：[早川治平氏]		1
		昭和32年度(1～3月)美術館使用割当表		3
		第3回都美術館借館団体懇談会		4
		国際学童美術研究会理事決定[名簿]		4
		安井記念賞贈呈		4
		盆栽について	村田久造	5
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第6回奎星会展、第6回高風会全国書道展、第7回モダンアート協会展、第16回水彩連盟展、第7回台東書道連盟展、第6回日本書道院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		自由美術中部展[愛知県文化会館]		4
No.74	昭和32年2月15日	東京都美術館増改築について	有光次郎	1
		写真：[有光次郎氏]		1
		国立西欧美術館建設予算決定		2
		都美術館増改築建築委員決定		3
		全国美術館会議の幹事会		3
		芸術院新会員決まる[名簿]		4
		昭和31年度毎日美術賞受賞者決定		4
		梅原龍三郎氏朝日文化賞受賞		4
		東京国際版画ビエンナーレ展開催[東京国立近代美術館]		4
		熱海美術館の開館		4
		写真：熱海美術館全景		4
		2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(朱葉会、春陽会、日本金工制作協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[訃報]尾上紫舟氏、黒田源次氏		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第9回読売アンデパンタン展、第25回池坊華道展、第10回示現会展、第33回白日会美術展、第7回一線美術展、第9回三軌会展、第16回創元会展、第43回光風会展、第5回大東書道院展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.75	昭和32年3月15日	[鑑賞案内 その他]		
		20世紀のグッド・デザイン展[東京国立近代美術館] ほか		2
		『美術家まつり』について	藤野舜正	1
		写真:[藤野舜正氏]		1
		都美術館後援会作品寄贈依頼		3
		後援会からの懇願		3
		第6回全国美術館会議		3
		日本彫塑家クラブ総会		4
		昭和31年度芸術院賞授賞者決定[受賞者名簿]		4
		山崎覚太郎氏 芸術院会員就任祝賀会		4
		日本彫金会新役員決まる		4
		東陶会委員長決定		4
		創玄会結成[会員名簿]		4
		館内業者懇談会		4
		現代家具の話	剣持勇	5
		初めて油絵道具を揃える方々へ(7)	浅尾丁策	6
		3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(自由美術家協会、創玄会、対象)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第7回新興美術院展、第11回霹靂社展、第5回日本彫塑家クラブ展、第31回国画会展、第34回春陽会展、第25回日本版画協会展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		西洋絵画と彫刻の末公開作品展[ブリヂストン美術館] ほか		2
No.76	昭和32年4月15日	素人画家日曜画家所見	石川重信	1
		写真:[石川重信氏]		1
		都美術館所蔵洋画名作第2回巡回展		3
		浮世絵名作展覧会[赤坂離宮、佐藤記念室]		3
		美術館増改築第一回常任委員会・第一回建築委員会総会開催		3
		昭和31年度芸術選奨決定		4
		美術館事務所機構改革		4
		美術館後援会作品寄贈受付		4
		日本画講座(1)	谷信一	5-6
		[訃報]結城素明氏、後藤良氏、小林古径氏		6
		4月～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(創芸協会、第一美術協会、新制作協会、東陶会、十一会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第17回日本画院展、第2回新世紀美術協会展、第23回東光会展、第5回清真会展、第4回日本国際美術展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		近世初期風俗名作展[東京国立博物館] ほか		4
No.77	昭和32年5月15日	上野の杜	野田九浦	1
		写真:[野田九浦氏]		1
		美術館後援会作品寄贈受付		2
		日本画講座(2)	谷信一	8
		5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		10
		美術団体告知版(新世紀美術協会、京都工芸談話会、こけし連盟、立軌会、大阪日本画家連盟、旺玄会)		10
		個人消息、美術界レポート		10
		[鑑賞案内 都美]		
		第11回女流画家協会展、第13回現代美術協会展、第45回日本水彩画会展、第11回旺玄会展、第9回自主連立展、第6回創型会彫刻展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		前衛美術15人展[東京国立近代美術館] ほか		2
No.78	昭和32年6月15日	現代の書	金子鷗亭	1
		写真:[金子鷗亭氏]		1
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		2
		第2回都美術館所蔵洋画名作巡回展終了		3
		浮世絵名作展終了[赤坂離宮、佐藤記念室]		3
		写真:[浮世絵名作展会場風景]2点		3
		日本国際美術展賞[受賞者名簿]		4
		日展出品作品制限寸法決定		4
		都美術館増改築工事着工		4
		図:増築平面図		4
		日本画講座(3)	谷信一	5-6
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(春陽会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第26回朔日会展、第3回日本画府展、第53回太平洋美術会展、第5回光陽会展、第28回第一美術協会展、第11回職場美術展、第18回大日本書芸院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		ホノルル日本美術展[東京国立博物館]		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.79	昭和32年7月15日	ロンドン国際手工芸展へ作品を送るにあたりて 第15回手工芸美術展覧会	赤坂繁太	1
		写真：〔赤坂繁太氏〕		1
		国際美術協議会設置		2
		本島都教育長欧州へ出張		2
		〔訃報〕川合玉堂氏		2
		都美術館増改築工事		3
		図：都立美術館増改工事工程表		3
		美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		日本画講座(4)		5-6
		第13回日展公募規定		7
		7月～8月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(二紀会、朱玄会、ギャラリー創苑、日本美術会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第9回毎日書道展、第7回連合書道会展、第1回東方書道院展		2
No.80	昭和32年8月15日	日本前衛書作家協会発足にあたって	小川瓦木	1
		美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		日本古美術欧州巡回展		4
		前衛書作家協会設立総会		4
		日本はり絵協会設立		4
		日本画講座(5)		5-6
		8月～9月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(創造美術会、新美術界、タケミヤ画廊、東洋美術館画廊、楨而会、日本はり絵協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第42回二科会美術展、第42回日本美術院展、第12回行動美術展、第21回新制作協会展、第19回一水会展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		新収品特別展〔東京国立博物館〕 ほか		2
No.81	昭和32年9月15日	版画の知識	平塚運一	1
		写真：〔平塚運一氏〕		1
		美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		財団法人碌山美術館(仮称)設立計画		4
		国立近代美術館増改築工事着工		4
		臨時参与会開催		4
		〔訃報〕高畑翠石氏		4
		日本画講座(6)		5-6
		昭和32年度第42回院展受賞者〔名簿〕		7
		第42回二科展授賞者〔名簿〕		7
		第13回行動美術展受賞者〔名簿〕		7
		9月～10月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(日本美術家連盟、日本版画協会、日本前衛書作家協会、造形芸術研究所)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第25回独立美術協会展、第11回第二紀会美術展、第21回自由美術家協会展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		ピカソ展〔プリヂストン美術館〕 ほか		2
No.82	昭和32年10月15日	遇感	羽藤馬佐夫	1
		写真：〔羽藤馬佐夫氏〕		1
		IAPA総会日本代表に阿部展也氏を選出		2
		昭和33年ベニス・ビエンナーレ展選考委員決定		2
		昭和32年度文化勲章選考委員決定		2
		都美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		昭和32年度文化勲章授賞者文化功労者内定		4
		第3回都美術館借館団体懇談会開催		4
		太平洋美術学校開校		4
		版画講座(1)		5-6
		10月～11月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(新世紀美術協会、全日本書芸文化院、奎星会、日本書道教育学会、造形画廊、日本画府)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第13回日本美術展(日展)		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		中世の美術展〔東京国立博物館〕 ほか		2
No.83	昭和32年11月15日	今日の書道界	香川峰雲	1
		昭和33年度上半期美術館使用割当予定		3
		都美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		日本書道文化連合会設立		4
		版画講座(2)		5-6
		昭和32年(第13回)日展受賞者		7
		ベニスビエンナーレ絵画・彫刻出品者決定〔名簿〕		7
		故安井曾太郎氏胸像の建設		7
		11月～12月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(イエナ画廊、新制作協会、日本書道院、日本書道文化連合会)		8

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.84	昭和32年12月15日	個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第21回大潮会展、第10回勤労者美術展、第7回書道学会展、第32回国風盆栽会展、第24回書壇院展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		蕪村名作展〔日本橋三越〕 ほか		2
		本年度美術界回顧	谷信一	1
		都美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		第13回日展終了		3
		都美術館副館長、田中靖孝氏転任		4
		川合玉堂基金買上作品決定〔作品リスト〕		4
		新協美術会結成		4
		新象作家協会創立		4
		東京国立近代美術館休館		4
		版画講座(3)	平塚運一	5-6
		第4回サンパウロ・ビエンナーレ グランプリ決定〔浜口陽三氏〕		7
		美術団体告知版(新象作家協会、新協美術会、美術評論家協会、青陶会、鎌倉常磐山文庫、石井三柳堂画廊)		7
		12月～1月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第12回日本書道美術院展、第11回書道芸術院展、第6回独立書道会展、第5回書星会展		2
No.85	昭和33年1月15日	第6回回瀾会展		4
		年頭所感	早川治平	1
		写真：〔早川治平氏〕		1
		都美術館後援会作品寄贈〔寄贈者名簿〕		3
		増改築落成記念祝賀会		3
		日展新運営方式決定		4
		国際工芸展日本入賞〔入賞者名簿〕		4
		新国宝決定		4
		平塚運一・前田政雄・畦地梅太郎 版画小品頒布会		4
		近代絵画講座(1)	岡本太郎	5-6
		都美術館昭和33年度事業計画		7
		美術団体告知版(銀座画廊、日本前衛書作家協会、春陽会)		7
		1月～2月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第20回謙慎書道会展、第26回池坊華道展、第7回奎星書道展、第7回高風会全国書道展、第10回読売アンデパンダン展		2
No.86	昭和33年2月15日	多過ぎる美術団体	岩佐新	1
		写真：〔岩佐新氏〕		1
		ベルギー万国博覧会に日本美術品出品		2
		昭和32年度芸術院恩賜賞芸術院賞候補者決定〔候補者名簿〕		2
		五都美術商協同組合、芸術院会館建設へ協力		2
		都美術館参与・後援会理事合同会議		3
		美術団体懇話会結成		4
		国際造形芸術連盟委員会新委員決定		4
		第9回毎日美術賞受賞者決定		4
		第5回都美術館借館団体懇談会		4
		近代絵画講座(2)	岡本太郎	5-6
		都美術館業者組合結成		7
		九名会復活		7
		〔訃報〕辻本史郎氏、真野紀太郎氏、小野白峰氏、坂上明司氏		7
		2月～3月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(美術文化協会、新制作協会、埼玉前衛書人連盟、墨人会、美交社東京画廊、女流画家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 その他〕		
		螺鈿特別陳列展〔国立博物館〕 ほか		2
No.87	昭和33年3月15日	美術館と池坊華道展	藤原幽竹	1
		写真：〔藤原幽竹氏〕		1
		美術館後援会作品寄贈受付〔寄贈者名簿〕		3
		昭和33年度(4月～8月)借館使用割当決定		3
		昭和32年度恩賜賞院賞受賞者決定		4
		日本陶彫会新役員		4
		日本壁画協会創設		4
		新槐樹社創立		4
		近代絵画講座(2)	岡本太郎	5-6
		〔訃報〕横山大観氏、太田聴雨氏		7
		3月～4月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(新槐樹社、銀座教文館画廊、日本版画協会、国画会、東丘社研究所、書道同文会、菊耀社、日本壁画協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第44回光風会展、第17回創元会展、第34回白日会展、第6回彫塑家クラブ展、第6回大東書道院展、第32回国画会展、第35回春陽会展、第26回日本版画協会展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.88	昭和33年4月15日	[鑑賞案内 その他]		
		1958年度新進作家展[銀座サトウ画廊] ほか		4
		増改築の完成にあたって	早川治平	1
		写真：新装会場中央大ホール		1
		落成式の模様		3
		写真：4点		3
		日展新発足[新理事名簿]		4
		日本芸術院会員第一部決定		4
		全国美術館会議開催		4
		国立近代美術館増築工事完成並びに開館予定		4
		4月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第17回水彩連盟展、第24回東光会、第12回霹靂社、第3回現代日本美術展、第11回示現会展、第18回日本画院展、東陶会春季展		2
No.89	昭和33年5月15日	24回展雑感	佐藤一章	1
		写真：[佐藤一章氏]		1
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		昭和33年度下期(9月～12月)借館使用者割当決定		3
		美術家会館建設		4
		山口源氏、第5回ルガノ国際版画展グランプリ受賞		4
		クレパス版画の作り方	平塚運一	5-6
		美術団体告知版(自主連立展、日本芸術院、日本漆工協会)		7
		個人消息、美術界レポート		7-8
		5月～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第46回日本水彩画会展、第27回朔日会展、第12回女流画家協会展、第18回美術文化展、第7回創型会彫塑展、第10回自主連立展、第3回新世紀美術協会展、第14回現代美術協会展		2
		第54回太平洋美術会展、第8回新興美術院展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		ベルシャ美術展[東京国立博物館] ほか		4
No.90	昭和33年6月15日	水彩画の歩いて来た道と将来	細島昇一	1
		写真：[細島昇一氏]		1
		第7回全国美術館会議		3
		泰西名画(模写)展覧会作品目録(佐藤記念室)		3
		第3回現代日本美術展受賞者決定		4
		故牧野虎雄画集発行		4
		光琳生誕300年記念会設立		4
		水彩画の描き方	萩野康児	5-6
		美術団体告知版(東洋書道協会、能彫会、日本墨絵会)		7
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第29回第一美術協会、第10回三軌会10周年記念展、第6回光陽会展、第11回日本アンデパンダン展、第8回一線美術展、第8回台東書道連盟全国書道展、第12回旺玄会展、第5回日本画府展、第12回全日本職場美術展		2
		第6回平和美術展、第6回ニッポン展		4
No.91	昭和33年7月15日	一線美術の夢	岩井弥一郎	1
		写真：[岩井弥一郎氏]		1
		都美術館参与委嘱		3
		第4回都美術館後援会総会開催		3
		昭和33年日展審査員発表[名簿]		4
		水彩画の描き方(2)	萩野康児	5-6
		7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(流動美術研究所、国際観光美術家協会、青甲社、示現会、青季会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第7回日本書道院展、第19回大日本書芸院展、第10回毎日書道展、第2回東方書道院展、第8回連合書道会展		2
No.92	昭和33年8月15日	新しい中国の書道	香川京	1
		写真：[香川京氏]		1
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		堅山南風、伊東深水両氏芸術院会員就任祝賀会開催		3
		現代名家創作版画頒布会		4
		ピッツバーグ国際現代絵画彫刻展 出品者決定		4
		[訃報]藤井浩祐氏、水田竹圃氏、奥山錦洞氏、大智勝観氏		4
		水彩画の描き方(3)	萩野康児	5-6
		美術団体告知版(新超現実派、鑄金家協会)		8
		8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第13回行動美術展、第43回日本美術院展、第43回二科会美術展、第4回一陽会美術展、第20回一水会展、第22回新制作協会展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.93	昭和33年9月15日	[鑑賞案内 その他] 東京国立博物館8月特別陳列 ほか		2
		画家と展覧会	田辺三重松	1
		写真:[田辺三重松氏]		1
		第8回都美術館所蔵洋画名作巡回展開催		3
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		日本前衛書作家協会総会		4
		京都書作家協会創立		4
		示現会館開館		4
		水彩画の描き方(4)	荻野康児	5-7
		9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(愛知県文化会館、旺玄会、示現会)		8
		[訃報]明田川孝氏		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美] 第22回自由美術家協会展、第26回独立美術協会展、第12回第二紀会展、第1回日本美術展覧会(日展)		2
		[鑑賞案内 その他] ファン・ゴッホ展[東京国立博物館] ほか		2
		壁画について	島村三七雄	1
		写真:[島村三七雄氏]		1
No.94	昭和33年10月15日	美術家会館建設		2
		昭和34年1月～8月美術館使用割当予定		3
		昭和33年度文化勲章文化功労者内定		4
		光陽会絵画研究所		4
		燦樹社結成		4
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		5
		都美術館所蔵洋画名作巡回展開催		5
		図版:《海》橋原健三		5
		水彩画の描き方(5)	荻野康児	6-7
		美術団体告知版(白日会、写意派美術会、美術堂画廊、燦樹社)		7
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 その他] インド・東南アジア染色特別展[京都国立博物館] ほか		2
		新日展の発足に際して	山崎寛太郎	1
		写真:[山崎寛太郎氏]		1
		第1回日展特選者発表[受賞者名簿]		3
		写真:会場風景2点		3
No.95	昭和33年11月15日	美術評論家協会秋季総会		4
		東上沿線美術家懇談会結成		4
		朴土社結成		4
		美術団体告知版(みつぎ画廊、小松名店街画廊、現代美術協会、書道同文会、モダンアート協会、朴土社)		4
		水彩画の描き方(6)	荻野康児	5-6
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美] 第22回大潮会展、第8回書道学会展、第2回新槐樹社展、第33回国風盆栽展、第11回勤労者美術展、第25回書壇院展、第10回書道同文会展		2
		中国美術の示唆	谷信一	1
		写真:[谷信一氏]		1
		両陛下、日展へ行啓幸		3
		写真:会場内の両陛下		3
		第1回日展終了		3
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		第2回安井賞受賞者決定		4
		長谷川昌氏 ビッツバーグ200年国際展記念賞受賞		4
		小杉放庵氏芸術院会員辞任		4
No.96	昭和33年12月15日	朔日会彫刻部新設		4
		水彩画の描き方(6)	荻野康児	5-6
		12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(一線美術協会、美術文化協会、京都書道教育協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美] 第13回日本書道美術院展、第1回東京書道会展、第1回大同書道会展、第7回独立書道展、第6回書星会展		2
		第7回回瀾会展、第9回東京都教職員文化会展		4
		[鑑賞案内 その他] 仏画・書蹟展[京都国立博物館]		4
		年頭にあたって	早川治平	1
		写真:[早川治平氏]		1
		東京芸術大学美術学部卒業作品発表展		4
		三軌会油絵部新設		4
		[訃報]飯塚瑠斎氏、梶原貫五氏、羽田春埜氏		4
		水彩画の描き方(7)	荻野康児	5-7
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.98	昭和34年2月15日	美術団体告知版(東京書道会、大同書道会、新協美術会、奎星会、新象作家協会、書海社、東京書道連盟、邦画会、全日本学生美術連盟、全国連合書芸展、水彩連盟、銀座兜屋画廊)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第8回奎星会展、第16回秀作美術展、第21回謙慎書道会展、第7回大東書道院展、第8回高風会全国書道展、第3回新槐樹社展、第9回一線美術展		2
		第2回新協美術会展、第6回日本画府展		4
		展覧会という魔物	武士桑風	1
		写真：〔武士桑風氏〕		1
		昭和34年度芸術院賞・恩賜賞候補者決定〔候補者名簿〕		3
		第10回昭和33年度毎日美術賞受賞者決定〔受賞者名簿〕		3
		文化財保護委員の新委員		3
		松方コレクション返還決定		4
		サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展出品作家決定〔名簿〕		4
		日本書道評論家協会結成		4
		牧人社結成		4
		水彩画の描き方(8)	荻野康児	5-6
		玉堂記念館建設		7
		〔訃報〕石井柏亭氏、和田英作氏、三井義夫氏、米沢蘇峰氏		7
		美術団体告知版(新制作協会、黒潮会、立軌会、日本版画協会、水彩連盟、春陽会、中部在野美術家連盟、現代美術家協会、プリチストン美術館、日本書道評論家協会)		7
		2月～3月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第27回池坊華道展、第11回読売アンデパンダン展、第4回新世紀美術協会展、第11回三軌会展、第35回白日会展、第12回示現会展、第18回水彩連盟展、第19回美術文化協会展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		美術家会館建設第2回展〔日本橋高島屋〕 ほか		7
No.99	昭和34年3月15日	新しい水彩	互井開一	1
		昭和33年度芸術院賞・恩賜賞授賞者決定〔受賞者名簿〕		4
		第11回毎日書道展運営委員決定		4
		晨鳥社新役員		4
		十未会結成		4
		〔訃報〕伊奈重孝氏、河村双舜氏		4
		古典の技法、古典の学び方(1)	伊藤廉	5-7
		3月～4月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(日本陶彫会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第9回モダンアート展、第54回光風会展、第18回創元会展、第27回日本版画協会展、第7回日彫展、第36回春陽会展、第33回国画会展		2
		第25回東光会展		4
		〔鑑賞案内 その他〕		
No.100	昭和34年4月15日	篆刻作家協会展		4
		モダンアートの原動力	周讓吉	1
		写真：〔周讓吉氏〕		1
		第8回全国美術館会議		3
		都美術館後援会作品寄贈受付〔寄贈者名簿〕		3
		大阪美術協会研究所創設		4
		時形工芸会結成		4
		楨而会解散		4
		古典の技法、古典の学び方(2)	伊藤廉	5-7
		4月～5月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(時形工芸会、日本彫金会、新世紀美術協会、京都月光荘画廊、新象作家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第14回霹靂社、第5回日本国際美術展、第19回日本画院展、第33回東陶会春季展、第28回朔日会展、第30回第一美術協会展		2
		第9回新興美術院展		4
		〔鑑賞案内 その他〕		
		第11回京都市展〔京都市美術館〕 ほか		4
No.101	昭和34年5月15日	対照の美	町田敬一郎	1
		第8回全国美術館会議		7
		〔訃報〕斎藤与里氏		7
		美術団体告知版(自由美術家協会、日本陶彫会、中部自由美術家協会、全日本工芸美術家協会、日本木彫会、水彩協会、神奈川県美術協議会)		7
		5月～6月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第8回創型会彫塑展、第13回女流画家協会展、第11回自主連立展、第47回日本水彩画会展、第55回太平洋美術展、第7回光陽会展、第15回現代美術展、第7回平和美術展、第25回旺玄会展		2
		屋外彫刻	中野四郎	1
No.102	昭和34年6月15日	写真：〔第8回創型会彫塑展会場写真〕		1
		第8回日程規則決定		3
		第5回日本国際美術展受賞者〔名簿〕		4

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.103	昭和34年7月15日	古典の技法、古典の学び方(3)	伊藤 廉	5-7
		6月～7月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(行動美術協会、南画院、自由美術家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第13職美展、第2回新象展、第8回日本書道院展、第7回清真会書道展、第3回東方書道院展、第8回書海社展、第2回邦画展		2
		第11回毎日書道展、第2回毎日前衛書展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		旧松方浮世絵コレクション特別展[東京国立博物館] ほか		4
		突然変異と創作活動について	島津純一	1
		写真:[島津純一氏]		1
		昭和34年度下期(9月～12月)借館使用割当決定		3
		全日本工芸美術家協会新役員決定		3
		早川館長、世界博物館会議へ		4
		[訃報]河西豊太郎氏、横山嘉平氏、田辺嘉重氏		4
		人物画の技法	中村研一	5-7
		7月～8月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(中部在野美術連盟)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
No.104	昭和34年8月15日	第10回玄友会展、第9回連合書道展、第11回書道同文会展、第1回書学院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		美術文化協会アメリカ第2回展 ほか		2
		明るく楽しい連立書展	飯島春敬	1
		写真:[飯島春敬氏]		1
		美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		日本美術家連盟新役員[名簿]		4
		十一会展、米国へ		4
		春陽会研究会		4
		人物画の技法(2)	中村研一	5-7
		[訃報]清水六和氏		7
		8月～9月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(春陽会、東京国立近代美術館休館)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第44回二科会展、第44回日本美術院展、第14回行動美術展、第23回新制作協会展、第21回一水会美術展、第5回一陽会美術展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		北斎の風景画展[東京国立博物館] ほか		4
		ストックホルム	早川治平	1
		写真:[早川治平氏]		1
No.105	昭和34年9月15日	美術館後援会作品寄贈受付[寄贈者名簿]		3
		第9回都美術館所蔵洋画名作巡回展開催		3
		図版:《静物》堀田清治、《風景》向井潤吉、《島上の春》小林萬吾		3
		早川館長帰朝報告会		4
		秋季各会展受賞者[二科会・日本美術院・行動美術協会受賞者名簿]		4
		都美術館定例参与会開催		4
		人物画の技法(3)	中村研一	5-7
		美術団体告知版(日本美術会)		7
		9月～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第13回二紀会展、第27回独立美術協会展、第23回自由美術展、第2回日本美術展覧会(日展)		2
		[鑑賞案内 その他]		
		横山大観遺作展[東京国立博物館] ほか		2
		第5回一陽展に際して	荻野康児	1
		写真:[荻野康児氏]		1
		昭和35年1月～6月美術館使用割当		3
		各会展受賞者[一陽会・一水会・新制作協会]		4
		日本金工作家協会結成		4
No.106	昭和34年10月15日	工芸“円心”結成		4
		日本画というもの(1)	福田豊四郎	5-7
		10月～11月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(神奈川県箱根美術館、モダンアート協会、日本金工作家協会、工芸“円心”、創元会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第23回大潮会展、第26回書壇院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		正倉院宝物展[東京国立博物館] ほか		2
		茶碗作り	入山東石	1
		第2回日展特選者発表[受賞者名簿]		3
		写真:第2回展審査員		3
		第12回重要文化財の指定(絵画、彫刻、工芸、書跡、考古)		4
No.107	昭和34年11月15日			

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.108	昭和34年12月15日	美術評論家協会総会		4
		日本画というもの(2)	福田豊四郎	5-7
		美術団体告知版(大同書道会、新興書道会、回瀾会、美術文化協会、静岡県熱海美術館)		7-8
		11月～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第9回書道学会展、第12回勤労者美術展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		円山応挙展[大阪市立美術館] ほか		2
		退任にあたって	早川治平	1
		写真:[早川治平氏]		1
		皇太子殿下、日展へお成り		3
		第2回日展終了		3
		都美術館新館長就任		3
		芸術院新会員4氏(美術)決定[名簿]		4
		日本画というもの(3)	福田豊四郎	5-7
		堂本尚郎・田淵安一氏入賞(第11回リゾネ美術展)		7
		国会会版画部のアメリカ展		7
		第3回国際木版画展		7
No.109	昭和35年1月15日	12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(新橋画廊、関西画廊、八重洲画廊、アートクラブ層、孔雀画廊、たま画房、プリムス画房、モダンアート協会、日本抽象作家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第14回日本書道美術院展、第2回東京書道会展、第8回独立書道展、第2回大同書道展		2
		第8回回瀾会展、第7回書星会展、第9回高風会全国書道展、第10回東京都教職員文化展		4
		年頭に際して	堀口鋼鉄	1
		写真:[堀口鋼鉄氏]		1
		都美術館借館団体懇談会		4
		柳田泰雲氏渡米		4
		[訃報]上野山清貢氏		4
		日本画というもの(4)	福田豊四郎	5-7
		1月～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(新制作協会、新槐樹社、女流画家協会、蒼騎会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第1回新興書道展、第13回書道芸術院展、第9回奎星会展、第3回新協美術会展、第22回謙慎書道展、第8回大東書道院展		2
		第5回新世紀美術協会展、第7回日本画府展、第4回新槐樹社展		4
No.110	昭和35年2月15日	新しいものを生む心	中島邑水	1
		写真:[中島邑水氏]		1
		昭和35年都美術館後援会理事会		3
		都美術館改修工事		3
		昭和34年度芸術院賞候補[候補者名簿]		3
		海老原[喜之助]氏毎日芸術賞受賞		4
		阿部展也氏グッゲンハイム賞審査委員		4
		三多圭会結成		4
		日本画というもの(5)	福田豊四郎	5-7
		2月～3月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(三多圭会、栗津画廊、室町画廊、ケラ美術協会、サロンドジュワン、国際画廊、目白画廊、大倉集古館、新象作家協会、十柯会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第28回池坊華道展、第12回読売アンデパンダン展、第10回一線美術展、第20回美術文化協会展、第8回清真会書道展、第36回白日会美術展、第19回水彩連盟展		2
		第13回示現会展、第12回三軌会展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		1960年京都アンデパンダン展[京都市美術館]		4
No.111	昭和35年3月15日	美術文化	岡田徹	1
		昭和34年度芸術院賞恩賜賞授賞者決定[授賞者名簿]		4
		[訃報]河原義和氏		4
		人物画について	橋本明治	5-7
		3月～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(孔雀画廊、関西画廊、旺玄会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第10回モダンアート協会展、第46回光風会展、第19回創元会展、第28回日本版画協会展、第8回日本彫塑家クラブ展、第34回国画会展、第26回東光会展		2
		第37回春陽会展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		中国古美術名品展(藤田美術館) ほか		4
No.112	昭和35年4月15日	第5回美術家祭		1
		重要文化財新指定発表(84件)		7
		第3回高村賞受賞者決定		7
		都美術館職員異動		7

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		4月～5月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(自由美術家協会、独立美術協会、サロン・ド・ジュワン、十柯会、新宿第一ビル4階画廊、染色作家東京会、新槐樹社)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第4回日本現代美術展、第29回朔日会展、第10回新興美術院記念展、第40回朱葉会女流洋画展、第32回新構造社展、第13回創造美術展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		新収名品展〔東京国立博物館〕		2
No.113	昭和35年5月15日	朔日会第29回展を迎えて	白石延夫	1
		写真：〔白石延夫氏〕		1
		昭和35年6月～8月都美術館使用割当		3
		第10回都美術館所蔵洋画名作巡回展		3
		第9回全国美術館会議		3
		日本南画院結成		4
		人物画について(2)	橋本明治	5-7
		5月～6月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(竹川画廊、太平洋画会、書道同文会、東京都書道連盟、日本美術家連盟、日本南画院)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第31回第一美術展、第56回太平洋美術展、第14回霹靂社、第8回平和展、第5回新象展、第14回職場美術展、第2回日本総合書芸展、第8回光陽会展		2
		第48回日本水彩画会展		4
		〔鑑賞案内 その他〕		
		日本の説話画展〔京都国立博物館〕		3
No.114	昭和35年6月15日	第一美術	高橋亮	1
		写真：〔高橋亮氏〕		1
		昭和35年下期(9月～3月)都美術館使用割当予定		3
		昭和35～36年度都美術館参与委嘱		3
		『美に憑かれた蠹』荒井新著 発刊		4
		日月社新役員		4
		人物画について(3)	橋本明治	5-6
		美術団体告知版(新制作協会、日本美術会、新象作家協会、新橋美術研究所、二紀会研究所、新協美術会)		7-8
		6月～7月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第16回現展、第26回旺文会展、第2回東京都書道連盟展、第9回日本書道院展、第9回書海社展		2
		第4回東方書道展、第3回邦画展、第21回大日本書芸院展		4
No.115	昭和35年7月15日	印の話	石井雙石	1
		第3回日展規則決定		3
		本年度安井賞選考委員〔名簿〕		4
		1960年度グッケンハイム賞参加		4
		風景画について(1)	東山魁夷	5-7
		美術グループ同時代結成		7
		7月～8月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知版(日月社、同時代、全線美術館、連立展)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第12回書道同文会展、第10回連合書道展、第12回毎日書道展		2
No.116	昭和35年8月15日	印の話(第2話)	石井雙石	1,8
		写真：〔石井雙石氏〕		1
		風景画について(2)	東山魁夷	6-7
		9月の展覧会		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第45回日本美術院展、第15回行動美術展、第45回二科会展、第6回一陽美術展、第24回新制作協会展、第22回一水会展		2
No.117	昭和35年9月15日	日本画の夢	新井勝利	1
		写真：〔新井勝利氏〕		1
		昭和35年美術館改修工事完了		3
		後援会常務理事会報告		3
		全国美術館ガイド出版		3
		北欧美術館巡り	堀田清治	4
		風景画について(3)	東山魁夷	5-7
		9月～10月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		個人消息、美術界レポート		8
		美術団体告知版(新象作家協会、示現会、創造美術会、モダンアート協会)		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第28回独立美術協会展、第14回二紀会展、第24回自由美術展、第3回日本美術展覧会(日展)		2
No.118	昭和35年10月15日	絵と心	片柳忠夫	1
		写真：〔片柳忠夫氏〕		1
		昭和36年4月～6月美術館使用割当		3
		風景画について(4)	東山魁夷	5-7
		10～12月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.119	昭和35年11月15日	美術団体告知版(行動美術協会、知求会、美術文化協会、前衛美術会、旺玄会、自由美術家協会、創造美術会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第24回大潮会展、第27回書壇院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		日本国宝展[東京国立博物館] ほか		2
		秋夜迷想	川上景年	1
		大和文華館開館		2
		第3回日展特選者発表[受賞者名簿]		3
		写真：第3回日展会場風景2点		3
		第6回都美術館洋画名作巡回展		4
		大阪市立博物館開館		4
		美術評論家協会総会		4
		斉藤義重氏入賞[グッゲンハイム国際賞]		4
		[訃報]間所一郎氏、山下涯石氏、津金鶴仙氏、福島繁太郎氏		4
		風景画について(5)	東山魁夷	5-6
		美術工芸部門58件 重要文化財新指定		6
		美術団体告知版(京橋画廊、青陶会、土橋永昌堂画廊、関西新制作研究所、新協美術会、国画会、新象作家協会、日本南画院)		7
		11～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第10回書道学会展、第13回勤労者美術展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		第2回国際版画ビエンナーレ展[東京国立近代美術館] ほか		2
No.120	昭和35年12月15日	個展余録	上田桑鳩	1
		第3回日展終了		3
		第6回借館団体懇談会		3
		都美術館新館長沼沢武彦氏就任		3
		[訃報]前川千帆氏、白滝幾之助氏		4
		「染色」について	井上秀雄	5-7
		第2回東京国際版画ビエンナーレ入賞作家決定[受賞者名簿]		7
		1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知版(青年抽象作家集団、田代絵画研究所、白牙会洋画研究所)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第15回日書展、第3回東京書道会展、第9回独立書道展、第2回大玄会展、第9回回瀾会展、第11回都教職員美術展		2
		第3回大同書道展、第2回新興書道展、第8回書星会展、第10回高風会全国書道展		4
No.121	昭和36年1月15日	年頭に際して	沼沢武彦	1
		日本書道振興会設立		4
		深井隆氏 安井賞受章		4
		「染色」について(2)	井上秀雄	5-7
		1～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(造形ギャラリー、おぎくぼ画廊、日本南画院、日本書道振興会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第4回新協美術展、第14回書道芸術院展、第2回書道芸術アンデパンダン展、第10回奎星会展、第1回日本南画院展、第9回大東書道展、第23回慎書道会展		2
		第8回日本画府展、第5回新槐樹社展、第6回新世紀美術協会展		4
No.122	昭和36年2月15日	春寒妄想	中沢帰雲	1
		昭和36年都美術館改修工事		3
		都美術館後援会理事会		3
		昭和35年度文部省買上作品決定[作品リスト]		4
		[訃報]佐々木象堂氏		4
		「染色」について(3)	井上秀雄	5-7
		2～3月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(日本版画協会、日本陶彫会、日本画集団一社、土橋永昌堂画廊、大倉文化財団)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		東京芸術大学卒業生作品発表展、第29回池坊華道展、第13回読売アンデパンダン展、第21回美術文化展、第11回一線美術展、第13回三軌会展、第37回白日会展、20周年記念水彩連盟展		2
		第14回示現会展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		東京国立博物館鎌倉彫刻展 ほか		4
No.123	昭和36年3月15日	無題	山本御舟	1
		昭和36年度7月～8月美術館使用割当		3
		昭和36年度毎日展要項決定		4
		高村光太郎賞決定		4
		昭和35年度第11回芸術選奨受賞者決定		4
		[訃報]赤堀佐兵氏		4
		「染色」について(4)	井上秀雄	5-7
		3～4月の展覧会[団体展スケジュール]		8

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		美術団体告知板(自由美術家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第11回モダンアート展、第47回光風会展、20周年記念創元会展、第29回日本版画協会展、第27回東光会展、第35回国画会展		2
		第38回春陽会展		4
		[鑑賞案内 その他]		
		昭和35年度文部省買上作品披露展[東京国立近代美術館] ほか		4
No.124	昭和36年4月15日	発刊に際して	沼沢武彦	1
		写真:[沼沢武彦氏]		1
		重要文化財に指定(紙塑人形の鹿児島寿蔵氏、色絵磁器の加藤土師萌氏)		3
		創元会20周年記念事業		3
		福島賞設定		3
		社団法人日展理事改選		3
		北村西望記念館増築		3
		第17回日本芸術院賞決定		3
		[訃報]齊藤隆三氏、下中弥三郎氏		3
		古い面影	名取堯	4
		写真:[名取堯氏]		4
		3月の美術館団体展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		5
		特別受賞者芳名(美術文化展・一線美術協会展・三軌会展・白日会展・示現会展・水彩連盟展)		5
		ベルナル作《舞踏》清掃		6
		写真:ベルナル作《舞踏》		6
		秩父宮妃殿下御来館		6
		太田副知事来館		6
		人事異動について		6
		都美術館後援会		6
		4～5月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(画廊きのくにや、東陶会、立軌会、創型会、向彫会、創玄会、日本美術院彫塑部、仏教美術協会、ニュー・ジャパン・ギャラリー)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第9回日本彫塑家クラブ展、第29回東光会展、第38回春陽会展、第35回国画会展、第6回日本国際美術展、第21回日本画院展、第30回朔日会展、第35回東陶会展		2
No.125	昭和36年5月15日	美術界あれこれ	嘉門安雄	1
		都美術館所蔵美術作品		3
		創玄会再発足		3
		中沢弘光氏米寿祝賀会		3
		[訃報]柳宗悦氏		3
		東京都の近代美術館建設顛末	岩佐新	4
		写真:[岩佐新氏]		4
		4月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		5
		特別受賞者芳名(創元会展・モダンアート展・日本版画協会展・光風会展)		5
		昭和36年度都美術館整備実施計画		6
		都美術館後援会だより		6
		昭和35年度事業報告		6
		5～6月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(三笠画廊、春陽会、東洋美術学校、草炎会、北陸造型研究所、ハクホウ画廊)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第41回朱葉会展、第33回新構造展、第32回第一美術協会展、第11回新興美術院展、第15回女流画家展、第10回創型会彫塑展、第57回太平洋展、第27回旺玄会展		2-3
No.126	昭和36年6月15日	美術館の現状	河北倫明	1
		写真:国立近代美術館「現代の眼」展示より		1
		武蔵野に思う	高野吟雲	4
		昭和36年度(9月～3月)都美術館使用割当		5-6
		第2回バリ青年作家ビエンナーレ参加		7
		巡回日本国際美術展		7
		日本工芸会新理事長に松田権六就任		7
		4、5月の展覧会開催状況報告[入賞点数、入場者数等]		8
		特別受賞者芳名(日本彫塑家クラブ展・東光会展・春陽会展・国画会展)		8
		日本国際美術展へ皇太子ご夫妻来館		8
		写真:ご来館の両陛下 2点		8
		都美術館後援会だより		9
		昭和35年度事業報告(前号の続き)		9
		6～7月の展覧会[団体展スケジュール]		10
		美術団体告知板(東陶会、生活工芸集団、エコール・ド・トーキョー、日本工芸会、二科会)		10
		個人消息、美術界レポート		10
		[鑑賞案内 都美]		
		第4回新象展、第49回日本水彩展、第15回霹靂社展、第9回光陽会展、第14回創造美術展、第14回前衛美術展、第4回邦画会展、第8回新美術協会展、第17回現展、第3回日本総合書芸展、第15回職美展、第1回全国墨林展、第5回玄海全国書道展、第10回日本書道展		2-3
		第13回書道同文展		7
No.127	昭和36年7月15日	接吻とわが彫塑に想う	中村伝三郎	1
		京都の写生地	島村三七雄	4

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
		第4回日展要綱		5
		朝日書道展開催要項		5
		1961年日本宣伝美術展		5
		日本書道連盟新役員		5
		日展水彩作家協会設立		5
		現代工芸美術家協会設立		6
		第6回日本国際美術展の受賞作家		6
		カーネギー美術展の招待者〔名簿〕		6
		向彫会結成		6
		日本民芸協会新会長		6
		銀座ヤマト画廊新設		6
		5、6月の展覧会開催状況報告〔入賞点数、入場者数等〕		7
		7～8月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板（現代工芸美術家協会、日展水彩作家協会、大和美術画廊、日本デコラティブアート協会、第一美術協会、ヤマト画廊）		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第1回現日書道展、第6回東方書道院展、第3回東京都書道連盟展、第10回書海社、第9回平和美術展、第22回大日本書芸院展、第11回連合書道展、第13回毎日書道展		2-3
No.128	昭和36年8月15日	工芸界の現状	野間清六	1
		写真：〔野間清六氏〕		1
		オリンピック芸術展特別委員委嘱		3
		書道団体瑞雲会再興		3
		北海道立美術館建設		3
		美術家会館地鎮祭		3
		随筆 モデルと私	山本豊市	4
		6、7月の展覧会開催状況報告〔入賞点数、入場者数等〕		7
		〔訃報〕細島昇一氏		7
		8～9月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板（蔵鵬会、自由美術家協会、一線美術、日本美術会、ホルベイン画廊、二科会、日本版画普及会、初美画廊、ギャラリー京都、新美会、随鵬社、日本画府彫刻部）		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		再興46回日本美術院展、第46回二科会展、第16回行動美術展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		フランス美術展〔東京国立博物館〕 ほか		3
No.129	昭和36年9月15日	画壇の現状	田近憲三	1
		日本書道会発足		3
		国際美術協議会委員再選		3
		ベルシア陶器	白川一郎	4
		第10回全国美術館会議		5
		都内中・高校生徒の団体鑑賞の便宜のために		5
		都美術館友の会会則		5
		都美術館後援会だより		6
		7、8月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		7
		9～10月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板（九成社、モダンアート協会、新樹会、上松大雅堂）		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第7回一陽会美術展、第25回新制作協会美術展、第23回一水会美術展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		円山応挙名作展〔東京国立博物館〕 ほか		2
No.130	昭和36年10月15日	日本の美術館	隈元謙次郎	1
		東陶会解散		3
		S. A. S(彫刻家集団)結成		3
		日本実在派作家集団結成		3
		日本美術院山形展		3
		鐘	香取正彦	4
		第7回東京都美術館所蔵洋画名作巡回展の開催		5
		図版：《寂光院秋色》中沢弘光、《宇治橋》太田喜二郎		5
		中庭屋根取付工事等完了		6
		写真：2点		6
		文化勲章授賞者選考委員決定		6
		現代工芸大阪会役員		6
		現代工芸京都都会役員		6
		岡田謙三氏カーネギー展選考委員に		6
		昭和36年度東丘社新役員		6
		9月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		7
		特別受賞者芳名（二科美術展・日本美術院展・行動美術展）		7
		10～11月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板（S. A. S、現代工芸大阪会、現代工芸京都都会、日本実在派作家集団、再興東陶会）		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第15回二紀会、第29回独立美術協会展、第25回自由美術展、第4回日展		2

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.131	昭和36年11月15日	[鑑賞案内 都美]		
		青木繁展[日本橋三越] ほか		3
		中国と囲碁	有光次郎	1
		京都伝統彫刻家協会設立		3
		日本伝統工芸展受賞者決定		3
		思い出の一つ二つ	岩橋英遠	4
		第4回日展受賞者[名簿]		5
		写真：会場風景2点		5
		「東京都美術館使用割当実施要綱」決まる		5
		東京文化会館、展示室の利用について		6
		オリンピック東京大会芸術展特別委員		6
		美術家会館建設計画		6
		[訃報]伊藤陽康氏		6
		10月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		特別受賞者芳名(二紀会展・独立美術展)		7
		11～12月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(サントリー美術館、藤田美術館、日本水彩画会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第11回日本書道学会展、第25回大潮会展、第14回勤労者美術展、第28回書壇院展		2
		[鑑賞案内 その他]		
		サントリー美術館開館記念展 ほか		3
No.132	昭和36年12月15日	顧みて	名取堯	1
		筆の話	金子鷗亭	4
		昭和37年度(4月～8月)都美術館使用割当		5
		日展をご観覧[義宮様・池田首相]		6
		写真：ご観覧中の義宮様と池田首相2点		6
		日本芸術院新会員内定		6
		日本官公庁職員書道連盟設立		6
		新指定重要文化財		7
		9、10月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		12月～1月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(日本書道会、フジ画廊、初美画廊、ポスターギャラリー、日本実在派作家集団、前衛美術家集団アカデミーバンセ、関西画廊、創造美術会、新槐樹社)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第16回日本書道美術院展、第9回書星会展、第1回日本書学院展、第3回太玄会展、第10回独立書道展、第2回日本南画院展、第4回東京書道会展、第11回奎星会展、第10回回瀾会展、第3回新興書道展、第11回高風会展		2-3
		[鑑賞案内 その他]		
		現代日本彫刻小品展[神奈川県立近代美術館鎌倉] ほか		3
No.133	昭和37年1月15日	年頭に際して	沼沢武彦	1
		美術館の窓から(1)	村田良策	4
		昭和36年度東京都美術館使用団体懇談会		6
		11、12月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		第15回工美展		7
		[訃報]須田国太郎氏、町田敬一郎氏		7
		1～2月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(新槐樹社、日本南画院、国際墨絵協会、女流画家協会、エコール・ド・トーキョー、モダンアート協会、新宿画廊、新宿第一画廊)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第5回新協美術展、第3回エコール・ド・トーキョー展、第15回書道芸術院展、第3回書道芸術アンデパンダン展、第10回大東書道院展、第24回謙慎書道会展、第37回国風盆栽展、第9回日本画府展、第6回新槐樹社展、第3回大調和展、第7回新世紀美術協会展、第15回日本アンデパンダン展、東京芸術大学36年度卒業生作品発表展		2-3
		[鑑賞案内 その他]		
		日本名陶百選展[日本橋高島屋]		3
No.134	昭和37年2月15日	美術館の窓から(2)	村田良策	1
		毎日書道展審査員決定		3
		白土社結成		3
		第31回ベニス・ビエンナーレ国際美術展日本出品作家決定		3
		舞台美術協会結成		3
		[訃報]岡田よ志氏、横江嘉純氏		3
		雛祭りの変遷と今後の有方	西沢笛畝	4
		大田黒教育委員来館		6
		第7回「洋画名作巡回展」終了		6
		1月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		2～3月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		美術団体告知板(創型会、女流画家協会、舞台美術協会、白土会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美]		
		第30回池坊華道展、第14回読売アンデパンダン展、第10回清真会展、第12回一線美術展、第22回美術文化展、第38回白日会展、第15回示現会展、第21回水彩連盟展、第14回三軌会展		2-3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.135	昭和37年3月15日	〔鑑賞案内 その他〕		
		平安・鎌倉時代名品展〔東京国立博物館〕 ほか		3
		美術館の窓から(3)	村田良策	1
		写真：〔村田良策氏〕		1
		日本人形美術会結成		3
		感	森田茂	4
		写真：〔森田茂氏〕		4
		オリンピック東京大会芸術展示会場に決定		5
		文化勲章受章・日本芸術院会員就任祝賀会挙行		5
		都美術館後援会だより		5
		第5回シェル美術賞決定		6
		第1回県展選抜展受賞者決定		6
		第15回京都工芸美術展入賞者決定		6
		〔訃報〕吉田三郎氏、正宗得三郎氏、児島善三郎氏		6
		2月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		7
		3～4月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板(日本人形美術会、HBC三条ビル画廊、新世紀美術協会、神奈川県川崎美術協会、春陽会研究会、グループ人間、日本版画ギャラリー、大和美術画廊、新象作家協会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第30回日本版画協会展、第12回モダンアート展、第48回光風会展、第21回創元会展、第10回日本彫塑家クラブ展、第36回国画会展、第39回春陽会展、第28回東光会展		2-3
		〔鑑賞案内 その他〕		
		日本現代工芸美術展〔日本橋高島屋〕 ほか		3
No.136	昭和37年4月15日	ある風景の思い出	有光次郎	1
		昭和36年度芸術院賞受賞者決定		3
		昭和36年度(第3回)文部省買上作品決定		3
		第2回汎太平洋青年美術家展受賞者決定		3
		第12回芸術選奨受賞者山口長男氏に決定		3
		阿蘇の根子岳	田崎広助	4
		図版：《阿蘇の晩秋(根子岳)》		4
		3月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		7
		美術館人事異動		7
		5～6月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板(きのくにや画廊、神奈川県美術家協会、スキヤ橋ギャラリー、日本彫塑家クラブ、自由美術家協会、東京工芸美術家集団)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第5回現代日本美術展、第31回朔日会展、第22回日本画院展、第1回二紀100人展、第1回独立美術新人展、第33回第一美術協会展、第12回新興美術院展		2
		〔鑑賞案内 その他〕		
		神仏融合美術展〔奈良国立博物館〕 ほか		3
No.137 (5・6月 合併号)	昭和37年6月10日	彫塑界の現状-その管見-	中村伝三郎	1
		膠	田中青坪	4
		日本古美術総会展北海道巡回		6
		日展新理事・新評議員・新会員決定		6
		現代日本美術展入賞		6
		4、5月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		7
		6～7月の展覧会〔団体展スケジュール〕		8
		美術団体告知板(京橋画廊、水彩連盟、工彩会、白土会)		8
		個人消息、美術界レポート		8
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第58回太平洋美術会展、第16回女流画家協会展、第11回創型会彫塑展、第42回朱葉会展、第34回新構造展、第28回旺玄会展、第5回邦画会展、第5回新象展、第50回日本水彩展、第16回霹靂社展、第15回前衛美術展、第15回創造美術展、第10回光陽会展、第9回新美術協会展、第18回現展		2-3
		第16回職場美術展、第10回平和美術展、第2回全国墨林展、第4回日本総合書芸展、第12回台東書道連盟、第14回書道同文会展、第11回日本書道院展、第2回現日書道展、第11回書海社展、第7回東方書道展		5-6
No.138 (7月号)	昭和37年7月15日	エジプトの絵文字	水沢澄夫	1
		画学生時代	松本弘二	4
		昭和37年度(9月～3月)都美術館使用割当		5-6
		東京都美術館常設展覧会場(佐藤記念室)再開		7-8
		図版：《静物》児島善三郎、《習作》久米桂一郎、《猫と子供達》猪熊弦一郎、《伝通院》浅井忠、《入江》黒田清輝		7-8
		美術館後援会だより		8
		北海道巡回日本古美術展〔出品目録〕		9
		第5回日展要項		9
		新指定の国宝・重要文化財〔リスト〕		10
		5、6月の展覧会開催状況報告〔入選点数、入場者数等〕		11
		7～8月の展覧会〔団体展スケジュール〕		12
		美術団体告知版(五番館画廊、新興美術院、日本彫塑家クラブ)		12
		個人消息、美術界レポート		12
		〔鑑賞案内 都美〕		
		第4回東京都書道連盟展、昭和37年書教展、第10回書星会展、第14回毎日書道展、第5回毎日前衛書展、第12回連合書道展、第1回日本書道会展、第1回日本官公庁職員書道連盟展、第6回玄海全国書道展		2-3

巻号	発行年月日	目次	著者	頁数
No.139	昭和37年8月15日 (8月号)	[鑑賞案内 その他] 第12回日本宣伝美術会展[日本橋高島屋]		3
		現代の美術はどう動くか	田近憲三	1,3
		日本彫塑会発足		3
		モデル	菊池一雄	4
		6、7月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		美術団体告知版(一線美術会、一水会、名古屋フォルム画廊、アトリエ画廊、鹿児島画廊、二紀)		7
		8～9月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美] 第47回二科会展、第17回行動美術展、第47回日本美術院展、第8回一陽会展、第26回新制作協会展、 第24回一水会展		2-3
		[鑑賞案内 その他] 近代日本造形展[東京国立近代美術館] ほか		2
		日本の地方手工芸	野間清六	1
		米国政府全額支給美術留学生募集		3
		岡山県総合文化センター開館		3
No.140	昭和37年9月15日 (9月号)	第3回美術家欧州視察団員募集		3
		上野公園と私	田中忠雄	4-5
		第11回全国美術館会議(報告)		5-6
		7、8月の展覧会開催状況報告[入選点数、入場者数等]		7
		[訃報]河合栄之助、岸田麗子氏		7
		美術団体告知版(サロン・ド・ジュワン、有仲画廊、大阪梅田画廊、創玄会、日本漆工協会、南天子画廊)		7
		9～10月の展覧会[団体展スケジュール]		8
		個人消息、美術界レポート		8
		[鑑賞案内 都美] 第16回二紀会展、第30回独立美術協会展、第26回自由美術展		2
		[鑑賞案内 その他] 尾州家秘宝公開展[徳川美術館] ほか		2

柳瀬正夢の図書装丁原画資料

岩田 郁子

はじめに

画家・柳瀬正夢は1900年(明治33年)に愛媛県で生まれ、10代の頃より美術や文学の分野で才能を開花させた。未来派、三科、マヴォなど戦前の新興美術運動やプロレタリア芸術運動に参加するだけでなく、図書や雑誌の装丁、デザイン、文芸、漫画など多岐にわたる分野で活躍したが、1945年(昭和20年)に空襲により東京で死去した。

柳瀬の遺族が保管していた膨大な量の関連資料は、1990年(平成2年)頃に東京都美術館に寄贈されたあと、1995年(平成7年)に東京都現代美術館美術図書室に移管されて、現在は同室の貴重書コレクション「特別文庫」のひとつ「柳瀬文庫」として一般に公開されている。

柳瀬文庫には、柳瀬が装丁や挿絵を手がけた図書や雑誌、作品を出品した展覧会の目録のほか、日記やスケッチブック、原稿などの一次資料も含まれており、柳瀬自身だけでなく、近代日本美術史や社会運動史を研究する上でも重要な資料であるといえる。1991年(平成3年)に東京都美術館から『柳瀬文庫目録』が刊行されており、東京都現代美術館美術図書室に移管後は同室の図書情報データベースに登録されている。

柳瀬正夢の装丁による図書といえば、『太陽のない街』(徳永直著、1929年、戦旗社)や、『何が彼女をそうさせたか? (普及版)』(藤森成吉著、1930年、改造社)などが知られている。本稿では、柳瀬文庫所収資料のなかから、柳瀬が装丁に携わった図書の原画とされている一連の資料について考察する。

1 「柳瀬正夢装丁図書原画類」の内容

2014年(平成26年)現在、15件の図書のタイトルが「柳瀬正夢装丁図書原画類」の名で、東京都現代美術館美術図書室の図書情報データベースに登録されている。

大きさがおおむねA4サイズ以内で、画中に本のタイトルらしき文字が描かれていたり、背表紙や扉など本の装丁とおぼしき構図であるなどの共通する特徴から、これまで一括して「装丁原画類」として扱われてきた。しかし校正刷と思われるものも数点あり、すべてが柳瀬自筆であるという判断が難しいことから、本稿では「原画資料」と表記する。なお装丁図書の校正刷については、柳瀬文庫の「柳瀬正夢装丁関係資料ファイル」という資料にも数点が含まれている。

自筆原画と思われる資料は、紙に水彩、インク、墨、鉛筆などで描かれている。トレーズ紙がついていたり、柳瀬自身による印刷指示が書き込まれているなど、柳瀬の図書装丁への関わり

方がうかがえる。

これら原画資料を、実際に刊行された図書との比較で3つのグループに分類した。丸カッコ内は「柳瀬正夢装丁」として図書が刊行された際の書誌情報である。書誌の表記は東京都現代美術館美術図書室の書誌入力規則にしたがい、また刊行年の元号表記は省略した。

2 図書刊行時にデザインが採用された原画資料

以下の8点は、柳瀬正夢装丁として実際に刊行された図書が現存しており、そのデザインが原画資料と同じか、わずかに異なる資料である。

①新しき者と古き者

(オリョーシャ作、村田春海訳、プロレタリア科学研究所ソヴェート文学研究会編、1930年、鉄塔書院)

②犬・猫・人間

(長谷川如是閑著、1924年、改造社)

『柳瀬文庫目録』では「版画」と記載されているが、インクの状態から判断して校正刷と思われる。

③近世クーデター史論

(マラバルテ著、木下半治訳、1932年、改造社)

④審くもの審かれるもの

(中西伊之助・布施辰治著、1924年、自然社)

扉のデザイン。『柳瀬文庫目録』では「版画」と記載されているが、インクの状態から判断して校正刷と思われる。同じものが2点ある。

⑤戦後

(ルードウィヒ・レン著、六笠武生訳、1931年、改造社)

原画と校正刷が各1点ずつ現存している。

⑥何が彼女をそうさせたか? (普及版)

(藤森成吉著、1930年、改造社)

⑦山の季節

(平田佐太雄編、1942年、昭和書房)

⑧義人ジミー

(アプトン・シンクレア著、前田河広一郎訳、1926年、改造社)

東京都美術館に寄贈された当時に電子コピー機で作成したと思われる複写資料の冊子には、ほかの原画資料とともに『義人ジミー』の表紙原画の複写が綴じられていた。しかし『柳瀬文庫目録』には、「装丁図書原画類」として記載されていない。また原画資料を一括して収納していた箱にも現物が入っていなかった。そこで柳瀬文庫を再調査したところ、挿絵原画類を一括した「柳瀬正夢挿絵原画類」という収納箱から現物が発見された。鉛筆で描かれており、デザインが刊本と同じであることから、2013年(平成25年)に「装丁図書原画類」として図書情報データベースに登録された。



図3
原画資料「淡粧」

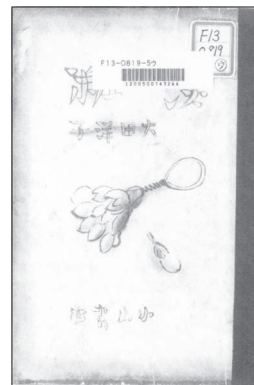


図4
刊本『淡粧』表紙
[国立国会図書館所蔵]

3 違うデザインで図書が刊行された原画資料

以下の3点は、同じタイトルの図書が、実際に柳瀬正夢装丁として刊行されて現存しているが、そのデザインの大部分が原画資料と異なる資料である。刊本の図版で注記がないものは、すべて東京都現代美術館美術図書室所蔵である。

⑨わが批判者の批判

(プレハーノフ著、外村史郎訳、1929年、叢文閣)

扉の日本語タイトルのレイアウトが、原画資料では文字が右上から左下に斜めに配置されているのに対して、刊行時は左に寄せた縦書となっている。なお同じタイトルの表紙とカバー共通の原画資料も所蔵しているが、こちらは刊行時と同じデザインである。



図1
原画資料「わが批判者の批判」

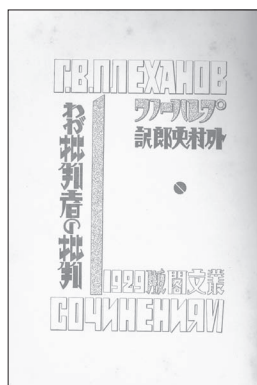


図2
刊本「わが批判者の批判」扉

⑩淡粧

(大田洋子著、1941年、小山書店)

原画資料においては女性の横顔が水彩で描かれているが、刊行時の表紙は花の蕾状のアクセサリーが描かれたデザインとなっている。なおタイトルと著者名のレタリングは同じである。表紙ではなく函のためのデザインであった可能性もあるが、函の存在を確認できていない。

⑪ホワイト・フアング

(ジャック・ロンドン著、堺利彦訳、1925年、叢文閣)

表紙・背表紙またはカバーと思われる構図の原画資料では、上部に横書でタイトルと著者名、下部に出版社名を配し、中央部に正面から見た狼の顔が簡単な線で描かれている。しかし刊本の表紙には絵がなく、紙面いっぱいにタイトル、著者、出版社の文字が配置されている。また刊本のカバー表紙部分には、劇画風の狼の横顔が描かれている。刊本の扉に描かれた狼の顔は横顔ではあるが、この絵のタッチは原画資料と似ている。⑩と同様に函のためのデザインであった可能性を捨てきれない。

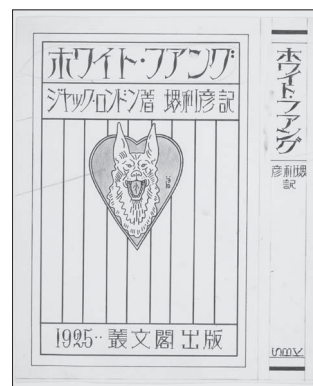


図5
原画資料「ホワイト・フアング」

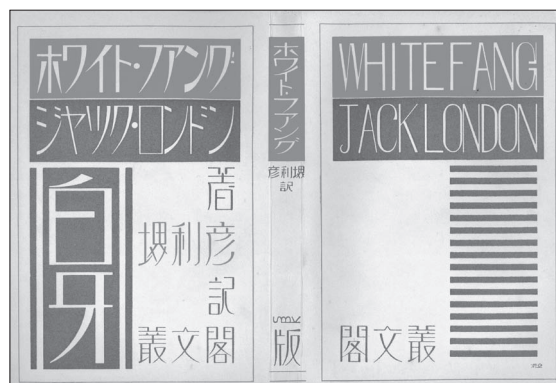


図6
刊本『ホワイト・フアング』表紙・裏表紙



図7
刊本『ホワイト・ファンク』カバー



図8
刊本『ホワイト・ファンク』扉

4 図書刊行について不明な点がある資料

以下の4点は「柳瀬正夢装丁図書原画類」として登録されているが、刊行された図書と書誌情報が一致しない、または刊行されたかどうか不明な資料である。

⑫実践

⑬暗き悩み

⑭磔茂左衛門

⑮汚ない殉教者

これら4点について解説すると同時に、さらに考察していく。

⑫実践

「柳瀬正夢装丁図書原画類」の箱に、表紙と思われる構図の原画が1点収納されていた。背表紙や扉にあたる部分がないため、刊本ではなく雑誌の装丁である可能性もある。文字情報については、左下部にタイトルとおぼしき「実践」という赤い文字が配置されているだけで、著者名や出版社名は記載されていない。

タイトルの右には、柳瀬のサインである「ねじ釘」のマークがある。このサインは1929年(昭和4年)7月に『嵐に立つ』(大山郁夫著、鉄塔書院)の装丁で初めて使ったとされているので、この原画資料「実践」の制作も同年以降と考えられる。黒と緑の背景に、ちぎれた鎖が描かれたデザインから、プロレタリア関係の刊行物であることが想像できるが、手がかりが少ないため、実際の刊行についての情報を得られていない。



図9
原画資料「実践」

⑬暗き悩み

表紙または扉と思われる構図において、「暁1」「暗き悩み」「今野賢三著」という文字が墨かインクでレタリングされ、鉛筆で「新潮社版」という書き込みがある。これらの文字情報から、1924年(大正13年)11月に新潮社から刊行された今野賢三(1893-1969)の長編小説『暁第1巻 闇に悶ゆる』との関係が推察される。

『闇に悶ゆる』は、第2巻『薄明のもとに』、第3巻『光に生きる』とともに「暁三部作」とよばれている。この刊本には「装丁 柳瀬正夢氏」という記載がある。原画資料、刊本とも画面を左右に色分けするデザインである。この原画資料の存在は、小説『闇に悶ゆる』が、「暗き悩み」のタイトルで刊行される可能性があったことを示唆している。



図10
原画資料「暗き悩み」

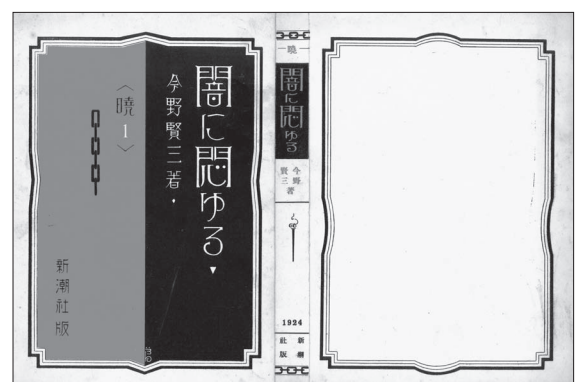


図11
刊本『闇に悶ゆる』カバー

⑭磔茂左衛門

⑧『義人ジミー』の原画と同じく「柳瀬正夢挿絵原画類」の箱から発見されたため、『柳瀬文庫目録』には記載されていない。表紙、背表紙、扉と思われる構図で鉛筆によって描かれ、「磔茂左衛門」「藤森成吉著」「新潮社版」という文字がレタリングされている。表紙、扉とも、先がふたまたに分かれた紐状の道具が図案化されて描かれている。

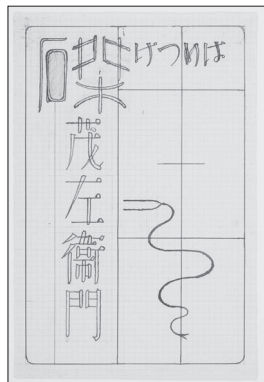


図12
原画資料「磔茂左衛門」表紙



図13
原画資料「磔茂左衛門」扉

藤森成吉(1892-1977)による戯曲「磔茂左衛門」は、1926年(大正15年)4月に雑誌『新潮』誌上で発表された。同年6月に浅草松竹座で井上正夫一座によって初演され、7月には新潮社から、別の戯曲「犠牲」も併せて『磔茂左衛門・附犠牲』というタイトルで刊行されている。

柳瀬正夢は、藤森の『何が彼女をそうさせたか? (普及版)』の装丁を手がけており、『磔茂左衛門・附犠牲』刊行の前月には、藤森と加藤武雄、木村毅の編集で同じく新潮社から刊行された『農民小説集』でも装丁を担当している。また柳瀬が美術を担当していた劇団「左翼劇場」が、1928年(昭和3年)4月に第1回公演として「磔茂左衛門」を築地小劇場で上演している。なお、この上演クレジットに柳瀬の名はなく、舞台装置を担当したのは村山知義(1901-1977)であった。

しかし前述の1926年刊行『磔茂左衛門・附犠牲』には、「装幀 繁岡鑒一」と記載されており、柳瀬の名はない。表紙には太陽の前に重ねられた無数の手、函には右上部に磔刑をあらわす十字がそれぞれ描かれており、柳瀬の原画資料とはまったくデザインが異なる。また藤森による「自序」では次のように書かれている。

「装幀その他の繁岡氏、伊藤氏達に感謝を述べる。」

繁岡鑒一(1895-1988)は、松竹座で「磔茂左衛門」の舞台装置を担当しており、同書には繁岡による舞台装置のデッサンも掲載されている。また築地小劇場で「犠牲」の舞台装置を担当した伊藤熹朔(1899-1967)のデッサンも掲載されていることから、「伊藤」は伊藤熹朔であると考えられる。

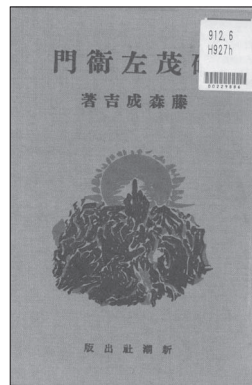


図14
刊本『磔茂左衛門・附犠牲』表紙
[国立国会図書館所蔵]

いずれにしても柳瀬の原画資料は、1926年刊行の本の装丁としては採用されなかったといえる。しかし原画資料において出版社名までデザインされていることを考えると、柳瀬に対して装丁依頼があったことは間違いないといえるだろう。参考までに、刊本に同時収録された「犠牲」は、1926年5月に雑誌『改造』誌上で発表されたが、上演禁止となり、『改造』の掲載号も発禁処分を受けている。もともと「犠牲」を入れずに「磔茂左衛門」のみで刊行する予定であったか、または再刊する話が出ていて、そのためのデザイン案であったか、いずれかの可能性が考えられる。

⑮汚ない殉教者

表紙・背表紙と扉のためと思われるデザインが、各1点ずつ現存しており、いずれも墨かインクで描かれている。

表紙では、左側に大きく縦書で「汚ない殉教者」と書かれ、その右にサイズを落とした「葉山嘉樹著」という文字が添えられている。右下部には縦長の黒い長方形が描かれている。背表紙では上部に「汚ない殉教者」、下部に「葉山嘉樹著」と書かれ、そのあいだに爆弾のイラストが描かれている。切断された裏表紙の左下部には「4号」「堂版」という鉛筆による書きこみがあり、「〇〇堂」という出版社名を追加する予定だったことが推測できる。

扉は、表紙と似た文字配置で、中央下部により細く縦長の黒い長方形、その右に重なるように爆弾のイラスト、その上に白く小さな正方形が描かれている。上辺には、印刷指示のためのトレース紙が貼りつけられている。「扉の赤は表紙よりもやゝ明るく」という鉛筆による書き込みがあることから、表紙と扉に赤い彩色を予定していたと考えられる。文字はいずれも横線は細く縦線は太く、セリフ(ひげ)がついたレタリングである。

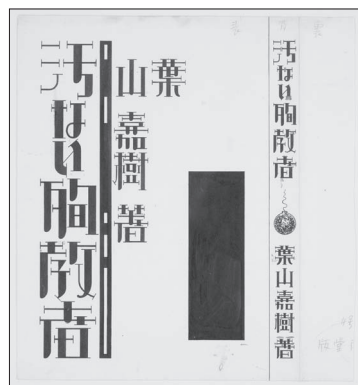


図15
原画資料「汚ない殉教者」表紙・背表紙

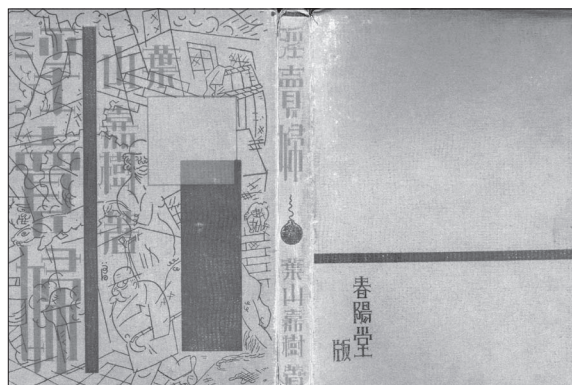


図17
刊本「淫売婦」カバー

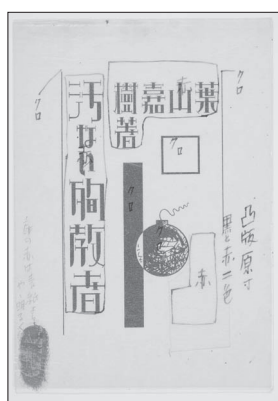


図16
原画資料「汚ない殉教者」扉

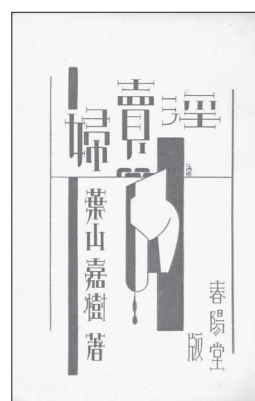


図18
刊本「淫売婦」扉

葉山嘉樹(1894-1945)はプロレタリア文学の作家であるが、「汚ない殉教者」というタイトルの著作は発表していない。前述の⑬「暗き悩み」や⑭「磔茂左衛門」のように、何らかの事情で「汚ない殉教者」というタイトルでは刊行されなかった著作である可能性が考えられる。

筆者は、この「汚ない殉教者」という原画資料が、1926年(大正15年)7月に柳瀬の装丁で春陽堂から刊行された葉山の短編小説集『淫売婦』の装丁原案であると推測した。

『淫売婦』の表紙では、紙面いっぱいに街の雑踏が描かれており、その上に赤い字でタイトル、著者名が重ねられている。それらの文字は原画資料「汚ない殉教者」とほぼ同じく配置されており、レタリングも原画資料と同様である。四角形と長方形を配したデザインは、扉の原画資料と共通しており、長方形は赤く塗りつぶされている。背表紙については、文字配置およびレタリングと、爆弾のイラストまで原画資料と同じである。カバーも同じデザインである。

扉は原画資料とデザインが若干異なっている。上部右から横書でタイトルがあり、「婦」の字の下から縦書で著者名、右下部に「春陽堂版」という出版社名が配置されている。この文字情報は、原画資料の裏表紙に書かれた「堂版」という書き込みとも矛盾しない。中央には、女性の下半身を図案化したイラストが描かれている。

デザインのほかに筆者が着目したのは、表題作「淫売婦」のなかの文章である。この小説は、語り手である洋行婦りの「私」が、横浜で出会った3人組の男によって強引に裏通りの倉庫に引き込まれ、不潔な上に重病にかかった女を見せられる、という内容である。小説前半では女の「汚ない」様子が克明に描写され、終盤には男たちの真の意図が明らかになった際の「私」の心情をあらわす次の一文がある。

「私は淫売婦の代りに殉教者を見た。彼女は、被搾取階級の一切の運命を象徴してゐるやうに見えた。」

つまり「汚ない殉教者」とは、「淫売婦」の言い換えであると考えられるのである。

表題作「淫売婦」は、葉山が1923年(大正12年)に名古屋で投獄中に執筆し、雑誌『文芸戦線』1925年(大正14年)11月号誌上で発表された。文学研究者の浦西和彦が作成した葉山の年譜によれば、葉山は1925年12月30日に、『淫売婦』出版の打ち合わせのために、当時住んでいた木曾から東京に出ているが、タイトル変更についての言及はない。しかし柳瀬の原画資料にトレース紙までついていることを考えると、「汚ない殉教者」というタイトルに変更して出版する話があったことは十分考えられる。

おわりに

柳瀬正夢が装丁した図書の原画資料に関して、刊行について疑問のある資料を中心に考察してきた。これらの資料を制作したと推定される時期に書かれた、柳瀬の日記や書簡などがあれば、制作や刊行の事情を知る手がかりとなるのだが、残念ながら情報を得られていない。柳瀬に装丁を依頼したと思われる今野賢三、藤森成吉、葉山嘉樹らに関する資料や研究から、事情が明らかになることを期待したい。また柳瀬の原画資料の調査がすすむことによって、彼ら作家に関する研究に貢献することもありうるので、双方の研究の発展につながることを願う所存である。

参考文献

- 『柳瀬正夢展』(1976年、柳瀬正夢研究会)
『柳瀬文庫目録』(東京都美術館編、1991年、東京都美術館)
『柳瀬正夢：疾走するグラフィズム』(柳瀬正夢作品整理委員会編、1995年、武蔵野美術大学美術資料図書館)
『柳瀬正夢：反骨の精神と時代を見つめる眼』(柳瀬正夢研究会編、1999年、柳瀬正夢研究会)
『柳瀬正夢展』(愛媛県美術館編、2000年、愛媛県美術館・福岡県立美術館・宮城県美術館)
『浦西和彦 著述と書誌 第3巻 年譜 葉山嘉樹伝』(浦西和彦著、2008年、和泉書院)
『柳瀬正夢全集 第1巻』(柳瀬正夢全集刊行委員会編、2013年、三人社)
『柳瀬正夢 1900-1945』(北九州市立美術館編、2013年、読売新聞社・美術館連絡協議会)
『築地小劇場』6巻6号(昭和4年6月号)特集「磯茂左衛門 藤森成吉」(1929年、築地小劇場)

本稿執筆にあたって、甲斐繁人、片倉義夫、白井かおりの各氏から御助言いただいた。また故・繁岡鑒一氏の御遺族からは、図版の使用について快く許諾を頂戴した。ここに記して深く感謝の意を表したい。

Last year a retrospective exhibition was held to celebrate the centenary of the birth of Yuki Katsura (1913-1991). Beginning work as an artist during the 1930s, she simultaneously developed three artistic techniques—collage, detailed depiction, and caricaturistic expression to explore the contrast of the different techniques, the relationship between subject matter and means of expression, and the reversal of values that took place within it. Her method of combining the three different expressional techniques within her work is recognized as retaining importance to this day and in this essay I would like to start by looking at two works, created on paper, which may indicate a connection between her work and that of Joan Miró, using her caricaturistic expression as a central core around which to explore this further. It will provide an opportunity to see how this artist related to the artistic expressions of her contemporaries as she developed her creativity, and to examine her use of the ‘carnival’ element that characterizes so much of her work.

I have discovered that these two works on paper, which were most likely produced between 1938 and 1940, borrow sections from the caricaturistic motifs in Joan Miró’s *Harlequin’s Carnival* and *Maternity*, rearranging them and adding color. Plates of these works by Miró appeared in Shuzo Takiguchi’s translation of André Breton’s book, as well as other writings of his on Miró that were published in books and magazines at the time, and in view of the fact that Takiguchi contributed a poem for Katsura’s 1938 work, it would appear likely that she referred to the reproductions in these publications to produce sketches of Miró’s work.

Knowing that she copied Miró’s work, if we look at her most caricaturistic works, *People I* and *People II*, that were submitted to Kyu-shitsu Kai (the Ninth Room Association) exhibition in 1940, we can see that the figure of a person in the middle of *People II* is reminiscent of the insect-like symbols that appear in Miró’s work. In addition, the body of the figure on the right has Katsura’s name written on it in Ashide-style script (a pictorialized style of calligraphy) and here, too, we can discern a similar form of expression—the coexistence of symbol-like human figures and letters within a picture—that was employed by Miró. Looked at as a whole, the greater part of the canvas is devoted to these caricaturistically symbolized expressions on flat-toned color, but it also includes a realistic, detailed depiction of grass that appears in the lower right. On the other hand, a photograph of *People I*, taken in 1976, shows that it originally had a flag pasted on

the upper left side. From this we can ascertain that this pair of works depicting people humorously that she produced for the Kyu-shitsu Kai (the Ninth Room Association) exhibition, were experimental expressions combining collage and detailed depiction with symbolized caricaturistic depictions of people similar to those by Miró.

Furthermore, in her 1938 self-portrait, *Foppish Millipede*, she again depicts a human as an insect, her use of thick and thin black lines in the drawing reminiscent of Miró’s. In *Cherry Blossoms*, *Spring* and *History of Mankind*, that were created after 1940, it can be speculated that the small, symbolic expressions of people and other creatures were developed from the caricaturistic motifs in the aforementioned two works by Miró. Among the works she produced in her later years are a variety of household objects with horns created in red silk in 1985. These are reminiscent of Tsukumogami (99 spirits), a popular theme in Japanese folklore in which everyday objects become animated, and can be likened to *Hyakki yagyo* (Night parade of one hundred demons), a carnival of household objects forming a midnight procession.

Again, in her picture of a woman, maybe from the 1940s, with short hair in a modern style and decorated with plants, clothed in work trousers, a variety of *kasuri*-patterned fabrics, with her name written on the collar, and carrying a bunch of flowers, she manifests her refined skill in mixing a variety of disparate elements. This work can be compared to Miró’s self-portrait that he produced in 1919. A native of Catalonia, he had depicted himself wearing a garibaldina, a collarless shirt that possesses a strong regional flavor. The fabric on the right side of the figure has been depicted in fine detail, while that on the left is executed using the cubist technique. In this way, he utilized the depiction of his own clothing to express the conflict that existed in art between works that concentrated on regional factors and those from Paris that featured the latest international styles. In this self-portrait, Miró explored his own situation immediately after the First World War, whereas for her part, by depicting part of her clothing through pencil sketching and combining this with watercolor to recreate the texture of the *kasuri* fabric, Katsura was able to confront this hybrid culture, not as something ludicrous, but demonstrating that choice and combination represent a form of creativity.

When considering the relationship between the work of Katsura and Miró, in addition to their shared use of caricaturistic

expression and reversal of values through a carnival-like world-view, I would also like to comment on their use of rope. In Miró's 1935 *Rope and People*, a hank of rope has been casually pasted in the middle of the picture, seemingly pushing the caricaturistic human figures aside, and the abrupt, visual impact of this must doubtlessly have shaken Katsura's collage sense. Katsura also uses rope in one of her representative postwar works, *Man and Fish*, but rather than paste rope onto the picture, she changed her medium, depicting it in detail using oil paints. From the viewpoint of this relationship between her work and that of Miró, who utilized a wide range of expression, we see that Katsura did not exist in isolation; they present a commonality in their creative work both possessing unique traditions that developed in culturally peripheral areas, and employing the diversity of modernism.

Comprehensive Table of Contents (2) for the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum*
(Published by Tokyo Metropolitan Art Museum)

Edited by Naho HASEGAWA

Continuing from last year, we are releasing a comprehensive table of contents covering the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum* from Issue 61 (January 1956) to Issue 140 (September 1962). For bibliographic information, please refer to Comprehensive Table of Contents (1) for the *News of Tokyo Metropolitan Art Museum*, published in Annual Report 2012, Bulletin No.15.

The library of the Museum of Contemporary Art, Tokyo (MOT), contains a large collection of material concerning Masamu YANASE (1900-1945) including original designs for book covers by him. This essay will focus on four pictures for books whose publication remains a mystery.

1. *Jissen* (Practice)

This work consists merely of the characters that read, 'Jissen' and there is no information concerning the author or publisher. To the right of the title there is the 'Nejikugi, screw nail' symbol that YANASE used to sign his work. He first used this symbol on the binding for *Arashi ni Tatsu* (Standing in the Storm) that was published in July 1929, so it can be assumed that *Jissen* was published subsequent to this date. It is thought that the design was for a proletarian-related work but no information on its actual publication can be discovered.

2. *Kuraki Nayami* (Dark Anguish)

A design of the characters for 'Akatsuki 1' (Daybreak 1), 'Kuraki Nayami' and 'by Kenzo IMANO', with 'published by Shinchosha' added in pencil. YANASE designed the cover for Kenzo IMANO's (1893-1969) book, *Akatsuki vol. 1, Yami ni Modayuru* (Suffer in the Dark), (Nov. 1924, Shinchosha), and the existence of this artwork indicates that 'Kuraki Nayami' had been considered as a tentative title for this book.

3. *Haritsuke Mozaemon* (Crucified Mozaemon)

Designs of the characters that read 'Haritsuke Mozaemon', 'by Seikichi FUJIMORI' and 'published by Shinchosha'. *Haritsuke Mozaemon* was a play by Seikichi FUJIMORI (1892-1977) that was published in the April 1926 edition of Shincho magazine, it was first performed in June, then published in book form by Shinchosha in July of the same year. However, it is clearly stated that the cover design of this publication was by Kenichi SHIGEOKA (1895-1988) and it differs from this material. YANASE's design was not used, but from the fact that the publisher's name is included, it can be seen that he had received a commission for the job.

4. *Kitanai Junkyosha* (The Soiled Martyr)

The preparatory design for this book cover gives the title as 'Kitanai Junkyosha' 'by Yoshiki HAYAMA', but Yoshiki HAYAMA (1894-1945) never published a book with this title. This writer presumes that this 'Kitanai Junkyosha' was actually a proposal for HAYAMA's collection of short stories that was published under the title, *Inbaifu* (The Prostitute) (July 1926, Shunyodo). The main reason for this is that in both designs the title and author's name are placed identically and the character design is the same for both. The second reason is that *Inbaifu* contains the passage 'In place of a prostitute I saw a martyr'. A woman in this story was filthy, suffered from a serious disease, and the fact that she was 'soiled' was stressed. In other words, 'Kitanai Junkyosha' can be thought to be a just an alternative way of expressing 'Inbaifu'.

平成25年度 東京都現代美術館年報
研究紀要 第16号

平成26年3月31日発行

編集・発行

公益財団法人 東京都歴史文化財団
東京都現代美術館

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1 電話03-5245-4111

製作

株式会社大伸社